

近世の富田焼—吉金窯跡出土遺物—について

森 下 友 子

1. はじめに

富田焼は香川県の東部、さぬき市大川町富田地区で作られた焼きもので、現代にもその技術は伝えられている。近世の富田焼の窯には大川町富田西吉金に所在する吉金窯跡、大川町南川横井に所在する横井窯跡（斉藤窯）、大川町富田西筒野に所在する平尾窯跡が知られている。

これらの3基の窯のうち、吉金窯跡は昭和43年、平尾窯跡は昭和47年に大川町教育委員会によって発掘調査が行われている。だが、正式な報告書が刊行されていないため、不明な点が多い。ここでは吉金窯跡から出土した遺物を中心として紹介し、吉金窯跡窯の操業年代と近世の富田焼の実態について検討したい。

2. 吉金窯跡について

(1)遺構

吉金窯跡はさぬき市大川町富田西吉金に所在し、さぬき市寒川町と大川町にまたがる丘陵の東斜面に位置する。窯は東西方向に細長く、焚口を東に向ける。全長40mの連房式登窯で、高低差9mを測り、8房の焼成室が検出されている。天井部は削平を受けていたが、壁体の一部は残存していた。壁体は粘土で構築されており、隔壁には一部に煉瓦が使用されている。おそらく、通焰孔は横狭間式であると思われる。焼成室の最下段は1.6m×3.0m、最上段は5.0m×6.0mを測る。県内最大の登り窯で、発掘調査の翌年の昭和44年に県の史跡として指定され、現在は窯の南半分が埋め戻された状態で、保存されている。

(2)出土遺物

発掘調査で出土した遺物は整理用コンテナ30箱程度に及ぶ。釉を施した陶器や磁器のほか素焼きの未製品、窯道具類がある。遺物の詳細な出土位置は不明であるが、大半は灰原から出土したものらしい。

第2～17図、写真6～19は吉金窯跡から出土した陶磁器や窯道具である。出土位置は不明であるので、種類ごとに紹介する。

〈磁器〉

①碗

碗は、口縁部がほぼ直口し、腰が張る丸形碗（1・3）、筒形碗（2）、小広東碗（4）、広東形碗（5～9）、端反り形を呈し、口縁部内面に文様を施す碗（10）、端反り形を呈するが、口縁部内面に文様を施さない碗（11・12）がある。丸形碗の1・2は口縁部外面に四方襷文を巡らす。3は外面に牡丹文を描く。内面には目跡が残る。6・9は内面に昆虫、11・12は外面に細線で雲竜文を描く。11は内面に蛇の目釉剥ぎが施される。12の口縁部は歪んでおり、口縁部内面には別個体の磁器片が熔着する。蓋は天井部がやや丸みを帯びる蓋（13・14）、端反り形碗の蓋（15）がある。13は内面に羽を広げた蝶を描く。15は他の磁器に比べ呉須の発色がやや明るい。天井部に「吉」、内面には岩波を描く。

②皿

皿は蛇の目凹形高台を呈するもの（16～22）と、蛇の目釉剥ぎを施すもの（24・25）がある。蛇の目凹形高台はいずれも低く、内面に二重の圈線で文様を区画するもの（16～20）と、全面に文様を施すもの（21）がある。16は底部が歪んでおり、外面には重ね焼きによる熔着痕がみられる。16～18には扇、19には糸巻きと「壽」を描く。20は波状口縁を呈する。22・23はやや大振りの皿である。23の口縁端部は立ち上がり。玉縁を呈し、外面に源氏香を描く。24・25は高台部の幅が広く、断面形は四角形を呈する。24の内面には花唐草を描く。

③香炉

26は白磁の香炉である。内面には輪状に熔着痕がみられる。

これらの磁器には胎土が白色を呈するもの（5～7・9・11・15・17・20・21・26）、やや灰色を呈するもの（3・4・8・10・12・14・16・19・22～25）、やや黄ばんでおり、呉須の発色もやや黒ずんでいるもの（13・18）の3種類に分けられる。胎土が白色を呈するものは肥前の磁器胎土とほとんど見分けがつかない。

〈陶器〉

陶器は碗、皿、鉢、香炉・火入れ、灯明皿・灯明受台・ひょうそく等の灯火具、汁次、徳利、搗鉢、土瓶、行平鍋、鍋、甕、六角壺、水甕、植木鉢など様々な器種がある。この中で、理兵衛焼の印銘である破風「高」を押印する陶器は碗と手焙りと思われる破片と碗がある。

①碗

碗は腰が張る丸形碗（27～34）、高台部が高く、あまり腰が張らない碗（35）、渦巻き高台の碗（36・37）、広東形碗（38）、やや腰が張る小型の丸形碗（39）がある。27は素焼きの未製品である。外面に文様を描く碗（27～31）と、灰釉の碗（32下部・33・34）、鉄釉の上に藁灰釉を掛けた碗（32上部）がある。27～29は連続唐草文を描く。27～31の文様の発色は暗緑色を呈する。29・33・34は目跡が残る。32は2個体の碗が熔着しており、見込みに3個の円錐ピンを置いて重ね焼きしている。渦巻き高台の碗36・37はいずれも3個の目跡が残る。体部下半から高台部は無釉である。38は見込みに鉄絵で「ね」を描く。39は外面に白泥で線、鉄絵で梅文を描き、その上から灰釉を掛ける。

②皿

皿は大振りのものが多く、いずれも高台部内外面は無釉である。蛇の目釉剥ぎを施す皿（40～45）と、蛇の目釉剥ぎを施さない皿（46～49）がある。蛇の目釉剥ぎを施すものの窯詰め方法は直重ねするもの（41）と、環状粘土紐を挟み込むもの（45）がある。口縁部の形態は肥厚するもの（40）と、折縁（45）で、輪花状を呈するもの（43・44）がある。40は暗緑色を呈する灰釉の上から鉄釉を掛ける。41は上下の皿ともに蛇の目釉剥ぎを施し、直重ねしたままで2個体が熔着する。上下とも灰釉の上に藁灰釉を掛ける。上部の皿も蛇の目釉剥ぎされ、輪状に熔着痕が残ることから、この皿の上にも別個体を重ねていたことがわかる。42は部分的に銅緑釉を掛ける。45は灰釉の上から部分的に鉄釉を掛け、蛇の目釉剥ぎの上にアルミナ砂を塗布し、環状粘土紐を置く。蛇の目釉剥ぎを施さない皿には円錐ピンを置くものが多い。47・48は熔着痕から円錐ピンを高台脇に置く。46の高台内には磁器片が熔着する。115・123は内面に型を用いた陽刻文様をもつ皿である。底部内面には施釉されていないことから、未製品であろう。

③鉢

鉢は内面に目跡が残るもの（49～52）、団子状の粘土塊が熔着するもの（53）がある。49の口縁部は輪花を呈する。灰釉を掛けた後で、銅緑釉を流し掛けしている。50は玉縁を呈する口縁部をもつ。灰釉を掛けた後で、鉄釉を流し掛けしている。52は灰釉の上から、藁灰釉を掛ける。53は内外面に暗緑色を呈する灰釉を掛ける。見込みには団子状の粘土塊が残る。54・55・58は口縁部を欠損する。内外面に灰釉が掛かる。58は外面に筒描きによる文様が描かれる。59も内外面に灰釉を施し、外面には筒描きによる文様が描かれる。口縁端部は無釉であることから、蓋物であろう。見込みには輪状に陶器片が熔着する。陶器片の外側・上部には灰釉が施釉され、内側は割れ口である。

④香炉または火入れ

香炉または火入れ（56・57・60～63）は外面に鑄が彫られるもの（60～62）がある。60・61は灰釉が掛かる。62は灰釉の上から一部鉄釉が掛かる。57の見込みには磁器小片が熔着する。

⑤灯明皿・灯明受皿・灯明受台

灯明皿（64～66）は灰釉が掛かり、内面に目跡が残る。64・66は菊花状の貼り付け、65は櫛描文を施す。内面には別個体が熔着する。灯明受皿（67）は灰釉が掛かる。受け部の立ち上がりは低い。ひょうそく（68）は内外面に鉄釉が掛かる。69は灯明受台である。内外面に灰釉が掛かる。底部外面には陶器片（碗？）が熔着する。これら2個体の間には円錐ピンが押し潰された状態で挟まっている。

⑥汁次

汁次（71）は把手の上部を欠損する。内外面に透明釉が掛かり、内面に3箇所目跡が残る。

⑦徳利

徳利（72～75）には壺徳利（72・73）がある。いずれも注ぎ口はつまみ出されて、鳶口を呈する。72は灰釉、73は灰釉を掛けた後、藁灰釉を掛ける。瓶（77）は外面には灰釉、内面には鉄釉を掛けた後で、部分的に灰釉を掛ける。

⑧播鉢

播鉢は大型（76）と小型（120）がある。76・120は灰釉が掛かる。

⑨土瓶

土瓶の蓋は落とし蓋（78）とつまみが上部に突出する蓋（79～82）がある。80～82は灰釉を掛けた後、筒描きによる文様を描く。80の上部には円錐ピンが熔着する。土瓶（83～86）は算盤玉形を呈するもの（84）、やや体部が丸みを帯びるもの（83）がある。釉は鉄釉を掛けるもの（83）と灰釉を掛けるもの（84・85）、灰釉を掛け、筒描きによる文様を描くもの（86）がある。

87～90は土瓶または鍋の体部から底部である。87は外面に3足が付き、その下には環状粘土紐が熔着する。89には押印がみられる。

⑩土鍋

行平鍋（91～93）はいずれも内面に灰釉、外面には鉄泥を塗り、飛鉋を施す。鍋は鉄釉を掛けるもの（94）、灰釉を掛けるもの（95）、灰釉後再度口縁部に灰釉を流し掛けするもの（96）、透明釉を掛けるもの（97）がある。

⑪甕

甕は灰釉を掛けた後で、部分的に暗緑色を呈する鉄釉を流し掛けするもの（98）、鉄釉を掛ける

もの（99・100）がある。また、110は外面に鎬を施す甕である。透明釉を掛けた後で、口縁部から体部上半に灰釉を掛ける。

⑫手焙り

手焙り（101～104）は外面に陰刻文様を施す。101・102は灰釉を掛けた後で、部分的に銅緑釉を掛ける。103は灰釉を掛けた後で、部分的に赤褐色の釉を掛ける。104は底部に鉄泥を塗布し、体部には灰釉を掛けた後で、鉄釉を流す。内面には鉄泥を塗布する。

⑬水甕

水甕（105～109）は外面に流水状の陰刻文様と刺突が施され、灰釉の上に部分的に鉄釉を流す。108は灰釉の上に部分的に鉄釉と銅緑釉を流す。107は部分的に砂を敷き、その上に団子状の粘土塊を置く。108・109の底部内面には部分的に砂を敷いている。

⑭植木鉢

植木鉢（111・112）は外面に貼付文を施し、内外面に灰釉を掛け、外面に部分的に銅緑釉を掛けるもの（112）がある。

⑮印銘資料・紀年銘資料

113～120・123・124は発掘調査によって出土した資料、121・122は採集資料で、いずれも印銘がある。印銘では理兵衛焼の刻印である破風「高」のほか、「富田」、「民山」、「岩」が確認されている。113・114の高台内は無釉で、渦兎巾を施し、破風「高」の印銘を押印する。113は陶器底部片で、内外面には灰釉が掛かる。薄手の碗であろう。114は素焼きの未製品である。体部は六角形を呈する。手焙りであろうか。115は陶器皿である。高台内は無釉で、「民山」の印銘がある。内面には型打ち成形による陽刻文様を施す。内面には灰釉、外面には鉄釉を掛ける。見込みは無釉であることから、未製品であろう。116も素焼きの未製品で、「富田」の印銘をもつ。119は高台内に「岩」が押印される。窯道具では129にも「岩」が押印される。121・122は皿で、口縁部内面に唐草文が彫り込まれる。清朝磁器を模倣したいわゆる十錦手である。121は破風「高」、122は「富田」が押印される。

紀年銘資料も数点ある。117は素焼きの未製品で、「…三（？）月」のヘラ書きがある。120は小型の搦鉢で、灰釉が掛かる。底部外面に「…政（？）十二月十二日…」のヘラ書きがある。寛政12年ならば1800年、文政12年ならば1829年に当たる。124は土管で、「寒川…」のヘラ書きがある。後述する土管「寛政十一巳未 寒川郡富田西村 焼物師助三郎焼」と同じ字体である。

⑯窯道具

窯道具にはサヤ鉢・環状粘土紐・敷き板・円錐ピン・円盤・環状円盤・足付き円盤・足付き環状円盤・焼き台・逆台形ハマ・タコハマ・チャツ・シノ・トチンがある。

サヤ鉢は底部の小さいもの（131）と平底のものがある。平底のサヤ鉢の中には方形の切れ込みをもつもの（170）がある。サヤ鉢は重ねる際に上部に粘土紐を貼り付ける場合（171）と、直に重ねる場合がある。サヤ鉢には陶器片の熔着した資料（172～180）があることから、陶器香炉または火入れ・碗・灯明受皿・灯明皿・土鍋・土瓶・土鍋蓋・土瓶蓋・鉢または皿をサヤ鉢に詰めて焼いたことが確認できた。173はサヤ鉢に香炉底部が熔着する。香炉は60～62に類似するもので、外面に鎬が彫られ、灰釉が掛かる。174も香炉の底部が熔着する。香炉の外面には鎬が彫られ、鉄釉が掛かる。172は上部のサヤ鉢に香炉の口縁部が熔着する。香炉は外面に灰釉を掛けた後で、部分的に

鉄釉を流す。175も香炉の口縁部が上部のサヤ鉢に熔着する。香炉の外面には鎬はなく、灰釉が掛かる。175の上部のサヤ鉢にも外面には灰釉、内面無釉の底部片（下部と同様の香炉？）が熔着する。また、133は大きな香炉の中に小さい香炉を入れて、直重ねしている。外側の香炉は外面に鎬が彫られ、灰釉を掛ける。内側の香炉は外面に灰釉を掛ける。

その他、サヤ鉢の中に陶器碗が熔着した資料（176・177・180）がある。176は碗の底部が熔着する。碗は内外面に灰釉が掛かり、見込みには目跡が残る。33・34の丸形碗と類似する。177は2個体のサヤ鉢が熔着する。下部のサヤ鉢には碗の底部が熔着する。177の碗も176・33・34の碗と類似する。下部のサヤ鉢の底部外面には砂が大量に熔着する。180は上部のサヤ鉢には灰釉の碗の体部片が熔着する。また、サヤ鉢の底部外面には灰釉の碗と、その内側に灰釉の灯明皿が熔着する。

179は2個体のサヤ鉢が熔着した資料である。上部のサヤ鉢には3個体の底部片が熔着する。このサヤ鉢の底部は下部のサヤ鉢の蓋になっているが、下部のサヤ鉢に納められていた3個体が熔着する。上部のサヤ鉢に溶着しているのは下から順に、鉢または皿底部、足付き環状円盤、土鍋または土瓶底部、円錐ピン、灯明受け皿の順である。いずれも灰釉が掛かるが、鉢または皿には灰釉の上から部分的に藁灰釉が掛かる。サヤ鉢に溶着するため形態は不明である。下部のサヤ鉢に熔着するのは上から順に、土鍋の蓋、灯明皿、円錐ピン、灯明皿である。いずれも灰釉が掛かる。179のサヤ鉢には様々の器種の陶器が納められていることから、サヤ鉢には必ずしも同一の器種を納めるのではなく、様々の器種を重ねてサヤ鉢に納めていたことがうかがわれる。

178は2個体のサヤ鉢が熔着する。上部のサヤ鉢に内面鉄釉の土鍋または土瓶の底部片が熔着する。下部のサヤ鉢には灰釉の土瓶の蓋と土瓶が熔着する。蓋は落とし蓋である。

環状粘土紐は45・87・134・149・150がある。45・134では蛇の目釉剥ぎの皿の上に環状粘土紐をのせ、別個体を重ねる。134は上部・下部ともに灰釉の鉢である。87は土瓶または鍋の底部であるが、底部外面に環状粘土紐が熔着する。160・164・165は敷き板の上に環状粘土紐が熔着する。

敷き板は160・164・165・166がある。160・164・165は環状粘土紐が熔着する。166は口縁部が折れ縁を呈する灰釉の皿の口縁部が熔着する。

団子状の粘土塊は53・107～109・128でみられる。大型の鉢・甕を重ね焼きする場合、砂を敷いた上に団子状の粘土塊を置く。128は団子状の粘土塊を置いた上に環状円盤を置いて、重ね焼きしている。

円盤には小型のもの（136・140・141・143）と大型のもの（138）がある。138は磁器質である。140は片面に低い突出部をもつ。136は円盤の下部に円錐ピン、その下には陶器底部が熔着する。陶器には鉄釉が掛かる。底部の形態から、おそらく碗であろう。

環状円盤は128・132がある。128は直径19.0cm程度である。128は内外面灰釉の掛かる甕または鉢底部の上に団子状の粘土塊を置き、さらにその上に環状円盤を置き、内外面灰釉の掛かる甕または鉢を重ねる。

足付き環状円盤には断面形が扁平な方形の環状円盤に足がつくもの（130・145・146～148・158・179）と、断面形が逆台形を呈する円盤に足がつくもの（144）がある。147は中央部に小さな孔がある。158は上部に陶器鉢（？）が熔着する。内面には灰釉が掛かり、目跡が残る。

焼き台は浅い鉢のような形態で、天井部に孔があくもの（126・129・142・154・155）と中央部に孔があき、下部はアーチ状に挟りをもつもの（137・153）がある。126は土瓶の内部に円錐ピン

をのせ、浅い鉢のような焼き台を置いている。142も焼き台に円錐ピンが熔着する。137の焼き台はアーチ状の挟りを下に向けた状態で甕の内部に熔着する。153はやや小型で、平坦面に砂が付着する。

逆台形ハマには小型（127）と大型のもの（157・159・161）がある。小型の127は上部に陶器底部が熔着する。外面に鉄釉を掛けるが、内面は無釉である。159の上部には磁器染付皿片が熔着する。161は上部に甕または壺（？）の底部片が熔着する。体部外面は灰釉、内面は無釉である。139は中央部に孔があき、環状円盤に類似するが、小さな底部をもち、上げ底を呈する。広いほうの面には接着痕が残る。

タコハマは167・168がある。平坦面ではない側に布目が残ることから、型作りであることがうかがわれる。167は焼き台の上部にタコハマをのせ、その上に上部がやや突出する円盤を置く。

チャツは151・152・156がある。151は口縁部の一部をV字にカットする。

シノは162・163がある。いずれも上部は平坦である。162は脚部の下部は平坦で、糸切り痕が残る。上部は液体状の泥しょうを塗布する。163は脚部は浅い凹みがみられる。

トチンは大型のものと小型のものがある。169はI字形を呈し、上部に円盤をのせる。下部には砂が付着する。

(3)出土遺物の特徴と窯詰め方法

以上のように吉金窯跡では様々な器種の陶磁器を焼成していた。また、多種類の陶磁器を焼いているため、窯道具にも様々なものがみられた。次に、これらの陶磁器の特徴とその製作年代や窯詰め方法について検討したい。

製品には陶器と磁器の両方がある。磁器碗は①丸形碗、②筒形碗、③小広東形碗、④広東形碗、⑤端反り形を呈し、口縁部内面に文様を施さない碗、⑥端反り形を呈し、口縁部内面に文様を施す碗がある。蓋は①天井部がやや丸みを帯びる蓋、②端反り形碗の蓋がある。このようにいくつかの形態がみられるが、いずれの形態も肥前磁器と非常に似通っている。肥前では、碗①は高台部がやや外側に広がっており、18世紀第4四半期に比定される。碗②は1780～1810年代、碗③は18世紀第4四半期、碗④は1780年代から19世紀前半、碗⑤は18世紀末から19世紀前半、碗⑥は1820～1860年に比定される。蓋①は1780～1810年代、蓋②は1820～1860年に比定される。

皿は蛇の目凹形高台を呈するものと、蛇の目釉剥ぎを施すものがあるが、碗と同じように皿の形態や文様も肥前磁器と非常に似ている。形態や文様等からみると肥前では16～23は18世紀末から19世紀初頭、24・25は18世紀後半から19世紀初頭に比定される。

陶器は理兵衛焼の印銘である破風「高」銘をもつ碗等のほか、碗、皿、鉢、香炉・火入れ、灯明皿・灯明受台・ひょうそく等の灯火具、汁次、徳利、播鉢、土瓶、行平鍋、鍋、甕、六角壺、水甕、植木鉢等の日常雑器が確認された。破風「高」を押印する陶器は発掘調査で、2点出土した。この破風「高」を押印する陶器については後述する。

先述のように碗は①腰が張る丸形碗（27～34）、②高台部が高く、あまり腰が張らない碗（35）、③渦巻き高台の碗（36・37）、④広東形碗（38）、⑤やや腰が張る小型の丸形碗（39）がある。①の中で、連続唐草文様の陶胎染付の碗は長崎県皿山本登窯跡2 T 5 B層に認められ、肥前の年代観では18世紀末から19世紀前半に比定される^{（註1）}。だが、29の底部内面には肥前製品には認められな

い目跡がみられる。32～34は灰釉の碗で、文様をもたないが、27～31と同形態である。いずれも29と同じように目跡が付くことから、碗の上に円錐ピンを置いて別個体を重ね焼きしたことがうかがわれる。この形態の灰釉碗は176・177・180のサヤ鉢に熔着しており、サヤ鉢に入れて焼いている。なお、180のサヤ鉢では灰釉碗の上に64・66と同形態の灯明皿をのせた状態で熔着している。灰釉碗もこの灯明皿と同時期であることは確実で、信楽ではこの灯明皿の製作年代は18世紀末から幕末頃に比定されていることから、碗①は18世紀末から19世紀前半のものと考えられる。碗③については萩焼にも同じ様な形態の碗があることから、萩焼の影響を受けたものかもしれないが、碗①と同様3個の目跡が認められる。碗④はその形態から広東形碗の影響を受けたことがうかがわれる。1780年から19世紀前半のものと考えられる。

皿・鉢は口縁部が外反し、輪花を呈するもの（43・44・49）と輪花を呈さないもの（40）があるが、40と44の高台の断面形態は同じである。また、蛇の目釉剥ぎを施すもの（40～45）と、蛇の目釉剥ぎを施さず、円錐ピンを置くもの（47・48）や足付き環状円盤または円錐ピンによる目跡が付くもの（49～52）があるが、40と52の高台部の形態が同じである。したがって、皿・鉢には輪花を呈するものや直線的なもの、蛇の目釉剥ぎを施すものや目跡がみられるものがあるが、これらの間に時期差があるとは考え難い。皿・鉢はいずれも体部下半から底部外面は無釉で、全面施釉のものは見当たらない。同じような形態の皿・鉢は佐賀県内野山北窯跡など肥前の18～19世紀代の陶器皿に認められる^{（註2）}。なお、179のサヤ鉢には皿または鉢が熔着する。熔着しているため、形態の観察は不可能であるが、灰釉と藁灰釉が掛かり、内面には蛇の目釉剥ぎはないことから、52のような鉢ではないかと思われる。このサヤ鉢には灯明受け皿や上部に突出したつまみをもつ土鍋の蓋も熔着する。これらは18世紀後半～19世紀代のものと考えられることから、前述の皿または鉢は18世紀後半～19世紀代のものであろう。そのほか、皿では内面に陽刻文様を施し、「民山」の印銘をもつものがあるが、これについては後述する。

灯明皿・灯明受け台は灰釉が掛かり、その色調は緑色がかった灰色で、色調・形態ともに漆原C窯跡や石塔窯等をはじめとする滋賀県の製品によく似ている。64・66の菊花状の貼付をもつ灯明皿は滋賀県蒲生町石塔窯^{（註3）}今津町茶碗山窯^{（註4）}や、信楽の隣町である三重県阿山町弥助窯跡^{（註5）}で見られる。65の内面には櫛描文が施される。65は破片であるため、全体は不明であるが、弥助窯や茶碗山窯出土の灯明皿では菊花の貼付文と櫛描文はセットで施されていることから、64・66と同じような形態であると思われる。石塔窯・茶碗山窯の操業は18世紀末～19世紀代と考えられていることから、吉金窯跡出土の灯明皿・灯明受け台も18世紀末～19世紀代のものと推定される。

徳利はいずれも鳶口の爛徳利であることから、19世紀代のものであろう。

土瓶は体部が算盤玉形を呈するものとやや丸みをもつものの2形態がある。やや丸みをもつものは上部しか残存していないので、注口の形態は不明である。滋賀県石塔窯でも算盤玉形土瓶と、やや丸みを帯びる扁平形土瓶の2形態が出土しているが^{（註3）}、算盤玉形を呈するものは注口が直線的に伸びる。直線的な注口をもつ土瓶は19世紀代前半のものであることから^{（註4）}、84・85は19世紀代前半のものと考えられる。また、体部の丸い83はこれらよりも古く、18世紀後半から19世紀前半のものと考えられる。

行平鍋はいずれも、飛鉋を施す。飛鉋は19世紀代に盛行することから、行平鍋は19世紀から幕末頃のものであろう。

香炉または火入れについては外面に鎬が彫られるもの（60～62）がある。このように体部外面に鎬が彫られる香炉または火入れは滋賀県石塔窯出土遺物^{（註3）}にもみられる。石塔窯のものは樹木のように上部が広がった文様を鎬で表しているが、吉金窯跡出土の60～62は体部ほぼ全面に鎬が彫られており、文様構成は異なる。

手焙り・水甕はその形態・文様ともに、瀬戸の製品に非常に似通っている。手焙り（101～104）は瀬戸の年代観では19世紀前半に比定される^{（註6）}。水甕も瀬戸製品に非常によく似ているが、瀬戸の製品よりも高台部の断面形がシャープである。外面には刺突が施されているが、あまり省略されていないことから、瀬戸では18世紀後半に比定される。また、瀬戸では外面に鎬を施す甕は19世紀代、外面に貼付文を施す植木鉢は18世紀末に比定される。

以上のように、磁器の形態は肥前製品と非常に似通っており、肥前磁器の製作年代から、18世紀第4四半期から幕末頃のものとして推定される。陶器は肥前の製品に似通っているもの、信楽や瀬戸の製品に似通っているものがあり、肥前、信楽や瀬戸では18世紀後半から幕末頃に比定されるので、製作年代は18世紀後半から幕末頃と考えたい。

次に、これらの製品を焼いた窯道具や窯積み方法について検討する。窯道具も多種多様である。磁器については窯道具との熔着資料は少ないが、159は逆台形ハマの上部に磁器皿をのせている。磁器碗の中で腰が張る丸形碗である3には目跡が残る。目跡は足付き円盤または円錐ピンの痕跡のどちらかであると思われるので、どちらかを間に挟み込んで、重ね焼きを行ったのであろう。また、磁器碗と陶器碗との接合資料（125）があることから、陶器と磁器を重ねて焼成していたのは確実である。

陶器の製品には様々な器種があるが、サヤ鉢の熔着資料をみると陶器の中でも碗・皿・香炉または火入れ・灯明皿・土瓶等の小型品はサヤ鉢に重ねた状態で入れて、焼成したことがうかがわれる。179でうかがわれるようにサヤ鉢には必ずしも同一器種を入れるのではなく、様々な器種を重ねているが、サヤ鉢内での重ね方については各器種ごとにみていきたい。

陶器碗は大半のものに目跡または円錐ピンが残る。32のように碗と碗の間に円錐ピンだけを挟むものもあるが、136のように底部内面に円錐ピンを置き、その上に円盤をのせるものもある。

陶器皿・鉢は蛇の目釉剥ぎをするものと目跡が残るものがある。48でみられるように円錐ピンは高台端部の真下に置くのではなく、高台脇に置く。蛇の目釉剥ぎをするものは41のように別個体の皿を直に置く場合や、45・134のように間に環状粘土紐を挟み込む場合がある。また、166の敷き板には灰釉の皿の口縁部片が熔着しているが、これはサヤ鉢の蓋に敷き板をのせたものであろう。陶器鉢には53のように団子状の粘土塊をおいて重ねているものがある。また、158の鉢には底部外面に足付き環状円盤が熔着していることから、足付き環状円盤や団子状の粘土塊を間に挟み込んで焼成したことがうかがわれる。

陶器香炉または火入れは133のように窯道具を間に置かず、香炉を直重ねしている例がある。

灯明受け皿は135のように直重ねするが、陶器灯明皿は64～66のように内面に目跡が残る。179のサヤ鉢には2個体の灯明皿が円錐ピンを間に挟んで熔着しているので、灯明皿を重ねる際には間に円錐ピンを挟んで重ね、サヤ鉢に入れて焼成したことがうかがわれる。

陶器土瓶の蓋は落とし蓋とつまみが突出するものの2種類ある。80はつまみが突出するものであるが、つまみの横に円錐ピンが熔着していることから、蓋を重ねる際にはつまみ付近に円錐ピンを

使用したことがわかる。87は土瓶であるが、底部外面に環状粘土紐が熔着することから、環状粘土紐を置き、その上に土瓶を置いている。また、土瓶の内側には87・88のように目跡が残ることから、別個体を土瓶の中に入れて焼いたことがわかる。126は土瓶または土鍋の底部であるが、底部内面に円錐ピンを置き、その上に逆台形状の焼き台を置いている。同様の焼き台は142があるが、やはり端部に円錐ピンが熔着する。126・142のような焼き台は滋賀県の石塔窯や三重県の弥助窯でも出土しており^(註3・註5)、信楽周辺でも使用されている窯道具である。178のサヤ鉢には蓋と土瓶が熔着しており、蓋を土瓶の上に重ねた状態で焼成したことがわかる。

瀬戸の陶器に非常に似ている水甕（107～109）には底部内面には数カ所砂を敷き、その上に団子状の粘土塊を置いているが、瀬戸でも同様の団子状の粘土塊を置いて重ね焼きを行う。128をみると団子状の粘土塊の上に環状円盤を重ねて、その上に別個体を重ねている。

以上のように器種ごとに、窯詰め方法をみてきた。磁器は窯道具との溶着資料がほとんどないが、肥前の窯道具であるタコハマ・チャツ・シノ・トチン・ハマが出土していることから、基本的には肥前の窯詰め方法とほとんど同じである。だが、碗の重ね焼きにピンを使うのは肥前では行われないことから、陶器だけでなく、磁器も信楽や瀬戸の影響を受けていることがうかがわれる。

陶器では小物をサヤ鉢に入れてサヤ鉢内で重ね焼きを行うが、これは信楽と同じである。また、窯道具で、環状粘土紐・円錐ピン・円盤・焼き台を使用するのも信楽と同じである。磁器と同じように陶器碗の一部にも肥前の製品とよく似たものがあるが、目跡が残る。先述のように、目跡は肥前の陶器にはみられない。皿・鉢の一部にも肥前とよく似た形態で、肥前と同じように蛇の目釉剥ぎが施されているが、蛇の目釉剥ぎの上に環状粘土紐を置くものがある。環状粘土紐は信楽や瀬戸では使用されるが、肥前ではみられない窯道具である。また、大形品の一部に瀬戸製品によく似た形態のものがある。団子状粘土塊を置くのも瀬戸と同じである。その上に環状円盤を置くのは瀬戸では行われない。

このように、窯道具も肥前、信楽、瀬戸と同じものがみられるが、その使用方法まで忠実に模倣しているとはいえず、各地の窯道具や技法を混ぜ合わせて使用していたことがうかがわれる。

3. 富田焼伝世品

富田焼の窯は吉金窯跡以外にもあることが知られているが、前述した吉金窯跡出土品以外の富田焼の作品にはどのようなものがあるだろうか。富田焼には「富田」の印銘をもつ伝世品がいくつか知られている。伝世品には特殊な高級品が多く、色絵の製品もある。

赤松松山作の作品では灰釉の茶入れ^(写真4)が知られる^(註7)。体部に「富田」の印銘をもつ。松山の孫の陶濱鑑定の裏箱書「庚戌 松山造之」がある。庚戌は寛政2（1790）年に当たる。

そのほか、作者不明であるが、富田の印銘をもつ焼瓦形小花生がある^{(写真3) (註8)}。灰釉が掛かる。写真2は陶器色絵秋草六角手あぶりである。これは外面に吉祥文と秋草を赤・黄・緑・藍・金・銀で描く。裏に「富田」の印銘がある。そのほか、富田の印銘をもつものに色絵の皿がある^(註9)。この皿の口縁部は輪花を呈し、内外面に白色の化粧土を塗る。口縁部内面には葵の紋と唐草が彫り込まれ、青色で描かれる。見込みには錆絵で、山水が描かれる。口縁部内面に施す唐草は清朝磁器を模倣したいわゆる十錦手で、吉金窯跡から表採された121・122と同様の文様をもつ。このように「富田」の印銘をもつ伝世品には特殊な高級品が多いが、製作者や製作年代がわかるものはほとん

どない。

4. 文献資料からみた富田焼

吉金窯跡出土遺物を概観し、富田焼の伝世品をいくつか紹介したが、文献資料や伝承には富田焼について何か手がかりとなる記録は残っていないのであろうか。

富田焼についての記録や伝承については、松浦正一氏や豊田基氏が研究を行っている^(註10)。両氏の研究によると富田焼に関する文献資料の中で最も古いのは赤松家に伝わる古記録である^(註11)。この古記録には赤松松山が富田で製陶を行ったことやその経緯が記されている。松山は平賀源内の弟子で、源内焼を焼いた工人であるが、先述のように富田の印銘をもつ作品が知られる。この古記録によると松山の家は祖父弥右衛門が筑前加須谷郡末村（現在福岡県粕屋郡須恵町）の陶工権平について陶法を学び、元文3（1738）年、志度（現在香川県さぬき市志度町）で唐津焼を始めた。その子清兵衛も製陶を継ぎ、孫の赤松松山も松林、入山という2名の弟といっしょに志度で製陶を行っていた。だが、「其の後、天明元年12月29日、不幸、出火にて全焼に逢ひ、後富田村なる藩公の窯跡にて唐津焼取立て仰付けられ焼出し、其の後、同地の亀田屋恒蔵と共に焼き後、寛政西2年恒蔵と分離し、寛政3年5月又、其の窯にて、独立し、寛政辰年、筑前賀須谷郡末村権平孫権助を雇ひ、入山、松林、両名の弟も手伝えり。其の後、志度浦に帰りて、家督を息、宇吉に譲りて、楽焼をも初めたり、時に享和3年なり」とあり、天明元（1781）年志度の家屋敷を全焼したため、松山は富田村の藩公の窯跡で焼きものを焼き、富田村の亀田屋恒蔵と共同で製陶を行っていたが、寛政3（1791）年5月独立し、第2人と九州筑前賀須谷郡末村から権平の孫権助を雇い入れて製陶を行った。その後、松山は再び志度に帰り、享和3（1803）年家督を長男宇吉に譲って楽焼（松山焼）を始めた。

この記録によると赤松松山が富田で製陶を始めたのは天明元（1781）年で、富田村の「藩公の窯跡にて」唐津焼を焼いたとある。では、この「藩公の窯跡」とはいったいどの窯であろうか。高松藩の御庭焼には理兵衛焼がある。理兵衛焼は代々紀太家が作陶を行っており、その作風は京焼系として知られている。『紀太家由緒書』^(註12)によると理兵衛焼の元祖は近江信楽出身の森島作兵衛重利である。昨兵衛は京都栗田口に移って陶業を行っていたが、初代高松藩主松平頼重によって正保4（1647）年、高松藩に召し抱えられ、慶安2（1649）年には姓を紀太理兵衛と改め、栗林荘（現在の栗林公園）の北に屋敷を賜り、窯を築いて、製陶を行った。理兵衛焼の窯跡は高松市内にあったということであるが、富田にもあったとの記載はない。だが、この由緒書には富田と理兵衛焼との関係について以下のようなことが記されている。紀太家4代目の理兵衛には実子がなかったので、藩命によって寒川郡神前村の大庄屋蓮井太郎三郎の次男伊三郎を養子として迎えている。伊三郎は元文2（1737）年弥助惟久と改名し、5代目理兵衛を襲名している。5代目理兵衛にも実子がなかったので、寒川郡鴨部中筋村（現在香川県さぬき市志度町鴨部）の三千蔵を養子とし、6代目としたが、まもなく病死したため富田西村の焼物師富永助三郎の弟子千蔵を養子として迎えている。神前村は現在のさぬき市寒川町神前にあたり、大川町富田西吉金に近い。大庄屋蓮井家の屋敷は吉金窯跡とは200mほどしか離れておらず、吉金窯跡一帯は蓮井家が所有していたらしい^(註13)。また、紀太家の伝承によると理兵衛焼は富田中村に所在する丸山の陶石を使用していた。豊田基氏は吉金窯跡の発掘調査で理兵衛焼の印銘である破風「高」を押印する陶器が出土したことから、こ

の「藩公の窯跡」は吉金窯跡を指し、吉金窯跡を築いたのは5代目弥助理兵衛ではないかと指摘している^(註14)。

そのほか、富田焼の陶工として富田西村の富永助三郎の名が資料にみられる。大川町富田西の庄屋国方家に伝わる文書には「一筆申達候 焼物師 富永助三郎弟子富田西村新七悻佐蔵…」^(註15)とあり、焼物師として富永助三郎の名が記載されている。また、「寛政十一巳未寒川郡富田西村 焼物師助三郎焼」の銘の入った土管が高松市十川の吉田川の堤防工事中や、大川郡内で出土している(第3図)^(註14)。さらに、この土管の銘と同じ字体で「寒川」と彫られた土管の破片が吉金窯跡からも出土している(第16図)ことから、富永助三郎が吉金窯跡で製陶を行っていたことは明確である。豊田基氏の調査によると、助三郎は安永4(1775)年生まれで、没年代は天保8(1837)年である。したがって、土管の銘にある寛政11(1799)年は助三郎が24歳の時に当たる。なお、助三郎も紀太家とのかかわりは深く、助三郎の弟子は紀太家の養子となり、7代目理兵衛千蔵を名乗っている。さらに、その子文太郎は八代目理兵衛惟晴となり、助三郎はその後見役として指導している。

そのほか、富田焼に関連する陶工では庸八が知られている。天保年間から幕末にかけて阿波や讃岐で活躍した陶工庸八は名工として、今でもその作品は高く評価されている。作品の印銘から、庸八は寛政元年(1789)生まれで、文久2(1862)年以降まで作陶を続けたことがわかっている。一時期讃岐を追放され、徳島でも作陶しており、茶陶など美術工芸的な陶器を製作した。讃岐では庸八は富田西の吉金地区井川氏宅付近で製陶業を営んだという^(註16)。井川氏宅は吉金窯跡の東方150mに位置するが、吉金窯跡からは庸八の印銘をもつ陶磁器は出土していない。

明治時代に入ると富田焼は吉金土瓶という名称で知られていた^(註14)。富田西吉金から平碎にまたがる金山の陶石を使用して、明治初年、吉金窯跡の北東約100mの吉金集落内に窯を築いて、昭和20年頃まで土瓶・こたつ・線香立て等の日常雑器等を製作していたという。大正11年には大川町富田西筒野に香川県製陶株式会社が窯を築き、主として富田丸山の陶石を使用して、富田焼の銘を用いた日常雑器を製造していた。九谷や瀬戸から多くの陶工を雇い入れて製陶を行っていたが、相次ぐ事故等が原因で昭和初期に途絶えた。この中の陶工藤田広一氏や香川県製陶会社の重役向井南洋氏は「富田」「富田焼」の銘を用いて作陶を続けた。昭和50年代からは大川町富田西吉金で紀太理光氏が富田焼を再興している。

5. 富田焼の陶工と吉金窯跡の操業

吉金窯跡出土遺物や富田焼伝世品等の陶磁器の検討と、文献資料にみられる富田焼について概観したが、両者の関係について検討を加え、富田焼の陶工と吉金窯跡の操業についてまとめてみたい。

富田焼と高松藩の御庭焼である理兵衛焼については古くから、その関わりが指摘されてきた。吉金窯跡の発掘調査で破風「高」の未製品(113・114)が出土していることから、理兵衛焼の一部が富田焼の窯である吉金窯跡で焼かれたことは確実であろう。豊田基氏は赤松家に伝わる古記録にある「富田村なる藩公の窯跡」は吉金窯跡で、吉金窯跡を築いたのは5代目弥助理兵衛ではないかと推定しているが、この推定を裏付ける興味深い分析を東京都飯田町遺跡の調査で行っている。飯田町遺跡は高松藩上屋敷にあたり、多数の破風「高」の印銘を押印する理兵衛焼が出土した。飯田町遺跡の調査ではこの理兵衛焼と吉金窯跡から出土した陶器片の両方を機器中性子放射化分析しており、両者は同じ系統の陶石を原料とすると指摘している^(註17)。さらに、印銘をレプリカ法によって

観察しており、分析の結果、1780年頃から1813年に機能していた735号遺構から出土した理兵衛焼陶器の破風「高」と吉金窯跡出土陶器の破風「高」は同タイプであるとしている^(註18)。このことは、吉金窯跡では1780～1813年の間または、それ以前に破風「高」の印銘をもつ理兵衛焼を焼いていたことを裏付けている。なお、赤松家の古記録では松山が富田で作陶を始めた天明元（1781）年にはすでに「藩公の窯跡」は存在するということであるから、5代目弥助理兵衛以前またはそれ以前の理兵衛が窯を築いていたということになる。だが、富田と関係が深いのは代々の理兵衛の中でも5代目弥助理兵衛以降であることから、豊田基氏の指摘どおり、5代目弥助理兵衛が吉金窯跡を築いたものと考えられよう。

このように赤松松山は1781年から吉金窯跡で富田焼を焼いたという記録があるが、写真4のように「赤松松山作」という松山の孫に当たる陶濱の書いた箱書きをもつ「富田」の印銘をもつ茶入れがあることから、松山が富田で作陶したのは間違いない。また、古記録から、赤松家に陶法を伝授した権平や孫の権助は筑前賀須谷郡末村粕屋郡末村の出身であることがわかるが、末村は現在の福岡県粕屋郡須恵町で、ここには黒田藩窯であった須恵焼がある。須恵焼は1758年より磁器が焼かれており^(註19)、須恵焼の技術が富田焼に非常に大きな影響を与えたことが考えられる。吉金窯跡出土遺物の中でも磁器碗の蓋13には羽を広げた蝶が写實的に描かれているが、須恵焼にも同じような蝶が描かれている^(註20)ことから、文様にも共通点が見出される。

吉金窯跡からの出土遺物は肥前製品を模倣した陶磁器が数多くみられるが、肥前だけではなく、京・信楽・瀬戸の陶磁器を模倣したものもある。また、作風だけではなく、窯道具もこれらの地域と同じものが使われていることから、これらの地域から陶磁器の製作技術がもたらされたことがうかがわれる。

遺物の特徴からみた製作年代は不明であるが、これらの遺物には陶工の銘の入った資料もある。「民山」の銘をもつ未製品（115）や「焼者師助三郎焼」の銘の入った土管（写真5）が出土している。珉山は赤松松山と同様、平賀源内の弟子で、源内焼に関わった陶工の一人として知られる。珉山は志度で安永9（1780）年に製陶を始めており、緑・黄・白色の三彩風の型物の陶器の作品が知られている^(註21)。115も型物の陶器で、吉金窯跡の推定操業年代と珉山の作陶年代は一致していることから、珉山も吉金窯跡で型物の陶器を製作したことが推定される。

また、写真5のような銘入りの土管が出土したことから、焼物師として記録に残る富永助三郎が18世紀後半から19世紀前半頃、吉金窯跡で製陶を行ったことは間違いない。

以上のように、吉金窯は18世紀中葉前後に5代目弥助理兵衛が築いた窯で、出土した陶磁器から、操業年代は18世紀中葉から幕末と考えられる。破風「高」印銘をもつ陶器も焼成していたが、1781年以降は赤松松山が筑前末村出身の陶工権平・権助に指導を受け、肥前・信楽・瀬戸風の陶器・磁器を焼いており、寛政年間頃からは富永助三郎や珉山が作陶し、吉金窯跡は幕末頃まで操業を続けていたと考えられる。

6. おわりに

近年では香川県においても高松城跡を始め、いくつかの近世遺跡の調査を行っている。だが、富田焼の実態が不明であったことから、消費地遺跡での富田焼の報告事例はほとんどない。今回、生産年代の確定している他地域産の陶磁器との比較・検討を行い、富田焼の時期比定を行ったが、今

後は消費地遺跡での富田焼の確認作業を行い、共伴遺物から富田焼の生産年代の裏付けを行いたい。

なお、本論をまとめるにあたり、大川町教育委員会、豊田 基、大橋康二、仲野泰裕、藤澤良祐、稲垣正宏、長佐古真也、浜田恵子、日下正剛、北條ゆうこの各氏よりご協力、ご教示をいただいた。なお、本稿は平成12年7月15・16日に開催された第2回徳島城下町研究会での報告をもとに文章化したものである。研究会に参加された多数の方々からご教示いただきました。記して感謝申し上げます。

- 註1 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 2000
- 2 東中川忠美『内野山北窯跡』佐賀県教育庁文化財課 1996
- 3 稲垣正宏『竹ノ鼻遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1999
- 4 稲垣正宏「滋賀県を中心とした江戸中・後期の陶器窯」『第9回 九州近世陶磁学会資料』九州近世陶磁学会 1999
- 5 金子智子・前川嘉宏・竹内英昭「阿山町丸柱所在の弥助窯跡について」『研究紀要』第8号 三重県埋蔵文化財センター 1999
- 6 藤澤良祐『瀬戸市史』陶磁史篇6 1998
- 7 個人所蔵
- 8 さぬき市大川町歴史民俗資料館所蔵
- 9 香川県歴史博物館所蔵
- 10 松浦正一「讃岐陶磁器史稿」香川県志度商業学校 1932
豊田 基「東讃の古窯に関する研究―特に富田焼について―」『文化財協会報』特別号7 香川県文化財保護協会 1965
豊田 基「陶業」『大川町史』 1978
豊田 基「讃岐のやきもの」『日本やきもの集成』10 1982
- 11 所蔵不明
- 12 紀太家所蔵
- 13 豊田 基「讃岐のお庭焼について」『香川県文化財調査報告』第9 香川県教育委員会 1968
- 14 豊田 基「東讃の古窯に関する研究―特に富田焼について―」『文化財協会報』特別号7 香川県文化財保護協会 1965
- 15 国方家文書
豊田 基「東讃の古窯に関する研究―特に富田焼について―」『文化財協会報』特別号7 香川県文化財保護協会 1965
- 16 岡田唯吉『郷土博物館第12回陳列品解説』鎌田共済会 1938
- 17 二宮修治・網干守「機器中性子放射化分析による理兵衛焼の分類―微量成分元素存在量による多変量解析」『飯田町遺跡』飯田町遺跡調査会 1995
- 18 丑野 毅「理兵衛焼の「高」字刻印―レプリカ法による観察―」『飯田町遺跡』飯田町遺跡調査会 1995
- 19 副島邦宏「北部九州における近世古窯跡の研究―筑前国鞍手郡山口村（現鞍手郡若宮町）浅ヶ谷窯跡について―」『九州歴史資料館研究紀要』24 1999
- 20 『筑前の磁器 須恵焼』須恵町教育委員会・須恵町歴史民俗資料館 1981
- 21 豊田 基「讃岐のやきもの民山」『さぬき美工』第36号 1966
- 22 豊田瓠庵『陶工 庸八』 1970

第1表 出土遺物観察表

番号	器 種	残存量	法 量	成形・調整等の特徴	胎土の色調	その他の特徴
1	磁器碗	口縁部 1/3, 底部 1/4	口径: 13.0 cm, 器高: 7.8 cm, 底径: 5.6 cm	口縁部歪む, 外: 染付(暗青色), 高台部畳付無釉, 内: 透明釉	淡灰色	焼成不良のため釉白色化
2	磁器碗	口縁部 8/1	口径: 10.4 cm	外: 染付(暗緑色), 内: 透明釉	白色	染付発色悪く, 滲む
3	磁器碗	口縁部 2/1	口径: 10.8 cm	外: 染付(暗青色), 透明釉, 内: 透明釉, 見込み目跡現存 1	淡灰色	
4	磁器碗	底部完存	底径: 3.6 cm	外: 染付(暗青色), 高台部畳付無釉, 内: 透明釉	淡灰色	
5	磁器碗	底部 1/2	底径: 5.2 cm	外: 染付(暗青色), 高台部畳付無釉, 内: 染付(暗青色)	白色	
6	磁器碗	底部完存	底径: 6.8 cm	外: 体部染付(暗青色), 内: 染付(暗青色)	白色	
7	磁器碗	底部 1/2	底径: 6.4 cm	外: 体部染付(暗青色), 高台部畳付無釉, 別個体付着 内: 透明釉	白色	体部外面一部 釉剥がれる
8	磁器碗	底部 4/1	底径: 6.8 cm	外: 染付(暗青色), 高台部畳付無釉, 内: 透明釉	淡灰色	
9	磁器碗	底部 1/2	底径: 6.4 cm	外: 染付(暗青色), 高台部畳付無釉, 内: 染付(暗青色), 底部別個体磁器片熔 着	白色	
10	磁器碗	底部 1/2	底径: 4.6 cm	外: 染付(黒青色), 高台部畳付無釉, 砂付着 内: 染付(黒青色)	淡灰色	
11	磁器碗	口縁部 1/4		外: 染付雲竜文(暗青色), 内: 見込み蛇の目釉剥ぎ	白色	
12	磁器碗	底部完存	口径: 10.4 cm, 器高: 5.2 cm, 底径: 4.2 cm	口縁部歪む, 外: 染付(暗青色), 高台部畳付無釉, 内: 透明釉, 別個体磁器片熔着	淡灰色	
13	磁器蓋	天井部完存		外: 染付(暗青色), 天井部端無釉, 内: 染付(暗青色)	やや黄みが かった淡灰 色	
14	磁器蓋	天井部完存		外: 染付(暗青色), 天井部端無釉, 内: 染付(暗青色), 別個体磁器口縁部片 3 点・高台部片 1 点熔着	淡灰色	
15	磁器蓋	口縁部 1/2	天井部径: 3.6 cm, 口径: 9.2 cm, 器高: 3.0 cm	外: 天井部先端無釉, 天井部染付「吉」(暗青 色), 内: 染付(暗青色)	白色	
16	磁器皿	体部 1/4	口径: 14.6 cm, 器高: 3.7~3.8 cm, 底径: 8.6 cm	外: 染付(暗青色), 蛇の目凹形高台, 内: 染付(暗青色)	灰色	底部反り上が る。別個体磁器 口縁部片熔着
17	磁器皿	口縁部 1/3	口径: 13.8 cm, 器高: 4.0 cm, 底径: 7.6 cm	外: 染付(暗青色), 蛇の目凹形高台, 内: 染付(暗青色)	白色	
18	磁器皿	体部 1/4	口径: 13.6 cm, 器高: 4.4 cm, 底径: 8.2 cm	外: 染付(暗青色), 蛇の目凹形高台, 内: 染付(暗青色)	やや黄みが かった淡灰 色	
19	磁器皿	体部 1/4	口径: 15.0 cm, 器高: 4.3 cm, 底径: 9.2 cm	外: 体部染付(暗灰青色), 透明釉, 蛇の目凹 形高台, 内: 染付(暗青色), 透明釉	淡灰色	口縁部やや歪 む
20	磁器皿	口縁部 1/4	口径: 13.6 cm	波状口縁, 外: 染付(暗青色), 内: 染付(暗青色)	白色	
21	磁器皿	口縁部 1/4	口径: 15.0 cm	口縁部歪む, 外: 体部染付(暗青色), 蛇の目凹形高台, 内: 染付(暗青色)	白色	
22	磁器皿	底部 1/6	底径: 11.4 cm	外: 染付(暗青色), 蛇の目凹形高台, 内: 染付(暗青色)	淡灰色	
23	磁器皿	口縁部 1/8	口径: 24.0 cm	口縁部玉縁, 外: 染付(暗青色), 内: 染付(暗青色)	淡灰色	

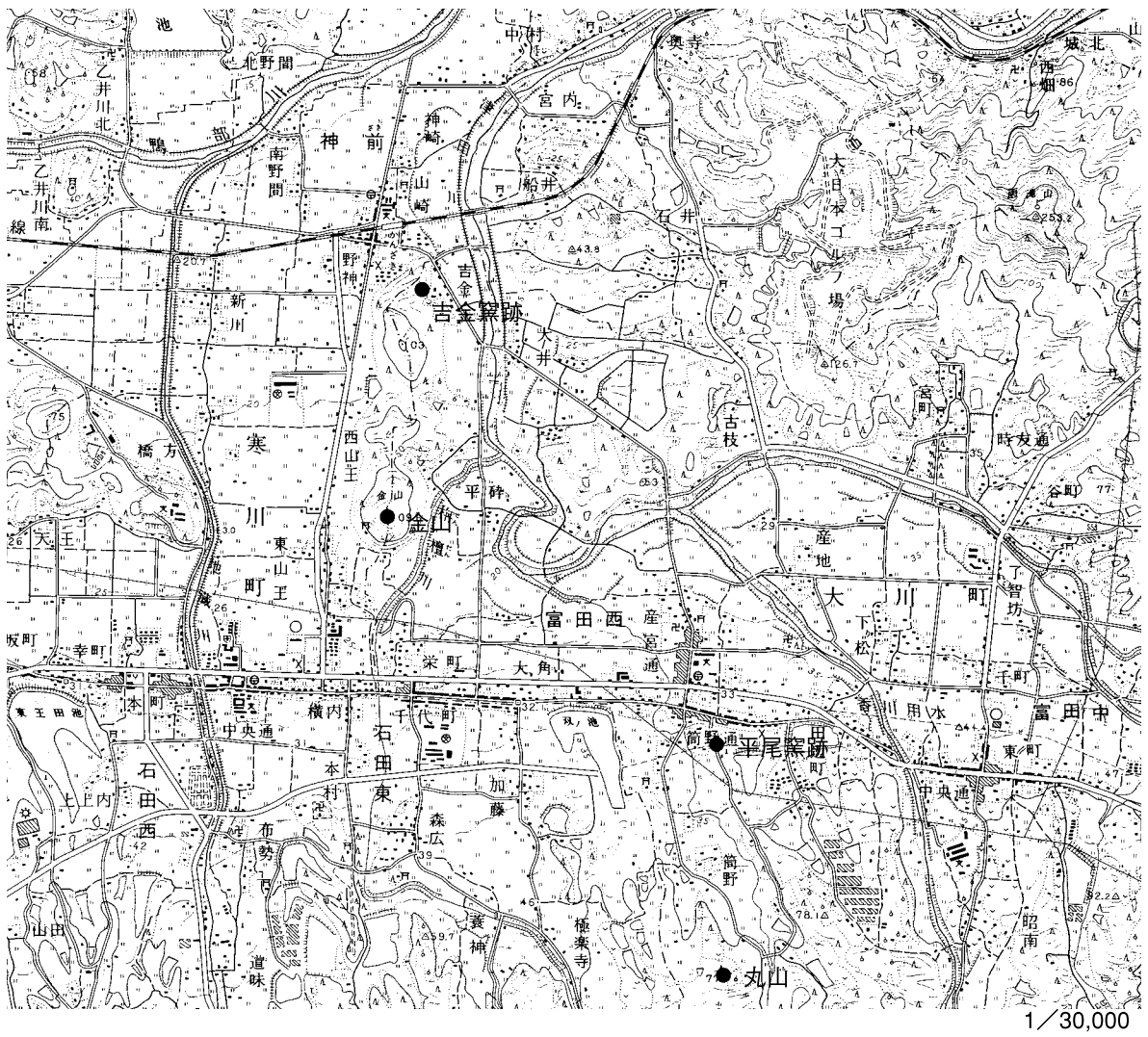
番号	器 種	残存量	法 量	成形・調整等の特徴	胎土の色調	その他の特徴
24	磁器皿	底部完存	口径：10.4 cm, 器高：2.3 cm, 底径：4.4 cm	外：透明釉，高台部畳付無釉， 内：染付(暗青色)，見込み蛇ノ目釉剥ぎ， 別個体付着痕	淡灰色	
25	磁器皿	底部 1/4	口径：14.8 cm, 器高：3.7 cm, 底径：9.0 cm	外：透明釉，高台部畳付無釉， 内：染付(暗青色)，見込み蛇ノ目釉剥ぎ	灰色	
26	白磁香炉	底部完存	底径：5.8 cm	外：体部やや青みがかった透明釉，底部無 釉，脚現存 1 (推定 3) 内：無釉，輪状の熔着痕	白色	
27	碗	完形	口径：10.4 cm, 器高：6.3～6.5 cm, 底径：4.3 cm	外：白化粧，染付唐草文(呉須暗褐色)，高台 部畳付無釉， 内：白化粧	褐色	素焼き
28	陶器碗	口縁部 1/4	口径：11.0 cm	外：灰釉，染付唐草文(呉須暗緑灰色)， 内：灰釉	暗灰色	
29	陶器碗	体部 1/6	口径：10.6 cm, 器高：6.2 cm, 底径：4.7 cm	外：別個体陶器片熔着，体部染付唐草文(呉 須暗褐色)，透明釉，高台部畳付無釉， 内：透明釉，見込み目跡現存 1	橙白色	
30	陶器碗	体部 1/2	口径：10.0 cm, 器高：7.6 cm, 底径：4.6 cm	外：染付(呉須黒緑色)，暗灰緑色釉(灰釉)， 高台部畳付無釉，付着物， 内：暗灰緑色釉(灰釉)	淡灰色～ 淡褐灰色	
31	陶器碗	底部完存	底径：4.4 cm	外：体部染付(呉須黒緑色)，灰緑色釉(灰釉)， 内：灰緑色釉(灰釉)	灰色	
32下	陶器碗	底部完存	底径：3.8 cm	外：体部・底部淡緑灰色釉(灰釉)，高台部畳 付無釉， 内：淡緑灰色釉(灰釉)，円錐ビン 3	淡灰黄色	2 個体が円錐 ビンにより付 着
32上	陶器碗	底部完存	底径：3.8 cm	外：体部鉄釉後一部藁灰釉，底部無釉， 内：鉄釉後一部藁灰釉，円錐ビン 3，別個体 熔着痕	淡灰黄色	2 個体が円錐 ビンにより付 着
33	陶器碗	底部完存	口径：11.0 cm, 器高：4.4 cm, 底径：6.3 cm	外：緑灰色釉(灰釉)，高台部畳付無釉， 内：緑灰色釉(灰釉)，見込み目跡現存 1，体 部上半陶器口縁部片(灰釉)付着	灰色	体部・底部焼 き膨れ
34	陶器碗	底部完存	底径：4.0 cm	外：淡灰緑色釉(灰釉)，高台部畳付無釉， 内：淡灰緑色釉(灰釉)，目跡 3	淡灰色	
35	陶器碗	底部完存	底径：5.4 cm	外：透明釉，鉄絵， 内：透明釉，鉄絵	淡灰黄色	
36	陶器碗	底部完存	底径：7.6 cm	ろくろ目顕著， 外：体部白黄色釉(灰釉)，底部無釉， 内：白黄色釉(灰釉)，目跡 3	淡黄灰色	
37	陶器碗	ほぼ完存	口径：9.0 cm, 器高：5.1 cm, 底径：4.0 cm	口縁部歪む， 外：渦巻き高台，底部無釉，体部灰色釉(灰 釉)，陶器別個体口縁部片熔着， 内：灰色釉(灰釉)，目跡 3	黄橙色	焼成不良のため 発泡している
38	陶器碗	底部完存， 口縁部 2/3	口径：11.0 cm, 器高：6.2 cm, 底径：6.0 cm	外：淡黄灰色釉(灰釉)，底部無釉， 内：見込み鉄絵「ね」，灰釉	淡黄灰色	
39	陶器碗	体部 1/3	口径：6.8 cm, 器高：5.0 cm, 底径：3.6 cm	外：体部鉄絵梅文，灰釉，底部鉄泥， 内：灰釉	淡灰黄色	
40	陶器鉢	口縁部 1/2， 底部完存	口径：19.8 cm, 器高：5.0 cm, 底径：9.0 cm	外：体部暗緑色釉(灰釉)後一部鉄釉，底部 無釉， 内：暗緑色釉後一部鉄釉，見込み蛇ノ目剥 ぎ，口縁部別個体片熔着	淡灰黄色	
41下	陶器皿	底部完存	底径：9.0 cm	外：体部淡緑灰色釉(灰釉)，底部無釉， 内：淡緑灰色釉(灰釉)後一部藁灰釉	淡灰色	2 個体付着
41上	陶器皿	底部完存	底径：9.2 cm	外：体部淡緑灰色釉(灰釉)，底部無釉， 内：淡緑灰色釉(灰釉)後一部藁灰釉，見込 み蛇ノ目釉剥ぎ，輪状に熔着痕	淡灰色	2 個体付着
42	陶器皿	底部 1/2	底径：7.6 cm	外：透明釉，底部～高台部無釉， 内：透明釉，体部一部銅緑釉，見込み蛇ノ目 剥ぎ	淡黄色	
43	陶器皿	底部 1/3	底径：12.4 cm	口縁部輪花状， 外：体部緑灰色釉(灰釉)，底部無釉， 内：緑灰色釉(灰釉)，見込み蛇ノ目釉剥ぎ， 一部別個体付着痕	灰色	
44	陶器皿	口縁部 1/4， 底部 1/3	口径：18.4 cm, 器高：4.2 cm, 底径：7.4 cm	口縁部輪花状， 外：体部淡緑灰色釉(灰釉)，底部無釉， 内：淡緑灰色釉(灰釉)，見込み蛇ノ目釉剥ぎ	淡灰色	

番号	器 種	残存量	法 量	成形・調整等の特徴	胎土の色調	その他の特徴
45	陶器鉢	底部 1/3	底径： 9.0 cm	外：灰色釉(灰釉)，底部～高台部無釉， 内：体部灰色釉(灰釉)後一部鉄釉，見込み 蛇ノ目釉剥き後アルミナ砂，輪状焼き 台熔着	灰色	
46	陶器皿	底部 1/2	底径： 8.4 cm	外：体部灰緑色釉(灰釉)，底部無釉，高台内 別個体(磁器)熔着痕， 内：灰緑色釉(灰釉)	褐色	やや歪む
47	陶器皿	底部完存	底径： 7.6 cm	外：体部灰釉，底部無釉，刻印， 内：灰釉，円錐ビン 1，目跡 3	淡黄色	
48下	陶器皿	底部 1/3	底径： 7.0 cm	円錐ビン 2 個， 外：体部淡緑灰色釉(灰釉)，底部無釉， 内：淡緑灰色釉(灰釉)	灰色	2 個体が円錐 ビンにより付 着
48上	陶器香炉・ 火入れ	底部完存	底径： 5.5 cm	外：無釉，体部下半円錐ビン現存 2 (推定 5)， 内：無釉	灰色	2 個体が円錐 ビンにより付 着
49	陶器鉢	底部 1/3， 口縁部 1/4	口径：18.4 cm， 器高： 5.4 cm， 底径： 6.2 cm	口縁部輪花状， 外：体部淡黄色釉(灰釉)後口縁部一部銅緑 釉，底部無釉， 内：淡黄色釉(灰釉)後銅緑釉，見込み目跡現存 1	淡黄色	
50	陶器鉢	底部 1/2	口径：24.8 cm， 器高：11.3 cm， 底径：11.0 cm	外：体部淡灰色釉(灰釉)，底部無釉， 内：淡灰色釉(灰釉)後一部鉄釉，見込み目 跡現存 3 (推定 5)	淡橙灰色～ 淡黄灰色	
51	陶器鉢	底部完存	底径： 7.6 cm	外：体部透明釉，底部無釉， 内：透明釉，目跡 3	淡黄色	
52	陶器鉢	底部ほぼ完存	底径： 8.4 cm	外：体部淡灰色釉(灰釉)後一部白色釉(薬 灰釉)，底部～高台部無釉， 内：淡灰色釉(灰釉)後一部白色釉(薬灰釉)， 目跡現存 4 (推定 5)	灰色～ 黄灰色	
53	陶器鉢？	底部完存	底径：10.6 cm	外：体部緑灰色釉(灰釉)，底部無釉 内：緑灰色釉(灰釉)，見込み団子状の粘土 塊 2，目跡 2	灰色	
54	陶器鉢	底部完存	底径： 8.4 cm	外：体部灰色釉(灰釉)，底部無釉， 内：灰色釉(灰釉)，目跡 3	淡灰色	
55	陶器鉢	底部 1/2	底径： 8.0 cm	外：体部緑灰色釉(灰釉)，底部無釉，脚部現 存 2 (推定 3) 内：暗緑灰色釉(灰釉)	淡灰色	
56	陶器香炉・ 火入れ	底部完存	底径： 4.2 cm	外：体部淡緑色釉(灰釉)，底部無釉， 内：無釉	淡灰色	
57	陶器香炉 ・火入れ	底部 1/3	底径： 5.0 cm	外：体部淡灰緑色釉(灰釉)，底部無釉，菊花 状の貼付現存 1， 内：無釉，磁器片付着	灰色	
58	陶器鉢	底部完存	底径： 8.0 cm	外：体部イッチンによる文様，暗緑色釉(灰 釉)，底部無釉， 内：暗緑色釉(灰釉)	灰色	
59	陶器鉢	底部 2/3	口径：11.8 cm， 器高： 6.5 cm， 底径： 9.2 cm	口縁部無釉， 外：体部暗緑色釉(灰釉)，イッチンによる 文様，底部無釉， 内：暗緑色釉(灰釉)，底部輪状に陶器灯明 皿？口縁部片(灰釉)付着	灰色	
60	陶器香炉 ・火入れ	口縁部 1/4	口径：10.8 cm	外：体部陰刻文様，緑灰色釉(灰釉)， 内：口縁部緑灰色釉(灰釉)，体部無釉	灰色	
61	陶器香炉・ 火入れ	底部完存	底径：10.0 cm	外：体部陰刻文様，暗緑色釉(灰釉)， 内：無釉，底部輪状に熔着痕	灰色	
62	陶器香炉・ 火入れ	底部 1/4	底径： 9.4 cm	外：陰刻文様，体部淡灰色釉(灰釉)，一部鉄 釉，底部無釉， 内：無釉	灰色	
63	陶器徳利	底部ほぼ完存	底径：10.0 cm	外：体部灰釉，底部無釉，輪状に熔着痕，刻 印， 内：無釉	淡灰色	
64	陶器灯明受 け皿	口縁部 1/4	口径：12.0 cm， 器高： 2.8 cm， 底径： 5.1 cm	外：口縁部灰釉，体部～底部無釉， 内：貼付菊花文，灰釉，目跡現存 3 (推定 5)	褐色	
65	陶器灯明皿	口縁部 1/3	口径：10.0 cm	外：口縁部灰釉，体部～底部無釉，体部輪状 に熔着痕， 内：口縁部別個体付着，灰釉，櫛描文様，目 跡現存 1	淡黄灰色	
66	陶器灯明受 け皿	口縁部 1/2	口径：11.4 cm， 器高： 2.8 cm， 底径：11.4 cm	外：口縁部灰釉，体部～底部無釉， 内：貼付菊花文，灰釉，目跡現存 2 (推定 4)	淡灰色	

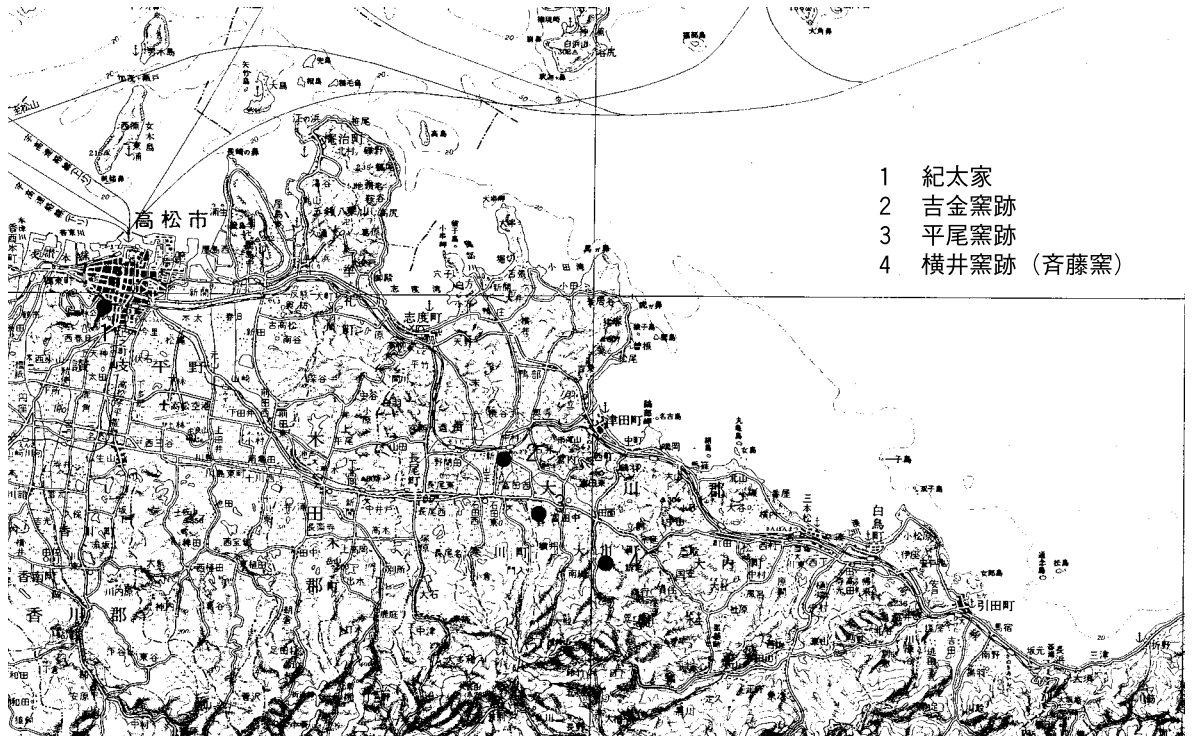
番号	器 種	残存量	法 量	成形・調整等の特徴	胎土の色調	その他の特徴
67	陶器灯明受け皿	口縁部 1/4	口径：11.0 cm, 器高：2.2 cm, 底径：4.0 cm	外：口縁部灰釉，体部～底部無釉， 内：灰釉	淡灰色	
68	陶器ひょうそく	口縁部 1/2	口径：6.2 cm	外：鉄釉， 内：鉄釉	淡灰褐色	
69	(下部)陶器碗	体部破片		外：淡灰緑色釉(灰釉)， 内：淡灰緑色釉(灰釉)，円錐ピン 1箇所	灰色	2個体が円錐ピンにより付着
69	(上部)陶器灯明受台	体部完存	口径：8.0 cm 器高：4.4 cm 底径：5.6 cm	外：体部灰釉，底部無釉， 内：受部凹み 1，灰釉，受け部上端無釉	灰色	2個体が円錐ピンにより付着
70	陶器灯火具	底部完存	底径：3.6 cm	外：体部灰釉，底部無釉， 内：灰釉	灰色	
71	陶器汁次	底部完存	底径：6.0 cm	外：把手，体部透明釉，底部無釉，体部下 半輪状の熔着痕， 内：透明釉，見込み目跡 3	淡褐色	
72	陶器德利	体部完存		外：淡灰緑色釉(灰釉)， 内：口縁部～体部上半淡灰緑色釉(灰釉)， 体部下半無釉	淡灰色	
73	陶器德利	頸部完存		外：淡灰色釉(灰釉)後白色釉(藁灰釉)， 内：口縁部淡緑灰色釉(灰釉)，体部無釉	灰色	
74	陶器德利	底部完存	底径：6.6 cm	外：体部灰釉，底部無釉 内：灰釉	暗灰色，茶褐色	
75	陶器德利	底部 2/3	底径：7.6 cm	外：体部灰釉，底部無釉 内：灰釉	淡灰色	
76	陶器搗鉢	底部 1/8		外：体部灰釉，底部無釉， 内：卸目，無釉	淡茶色	
77	陶器瓶	底部完存	底径：18.6 cm	外：体部・底部淡灰色釉(灰釉)，高台部畳付 無釉， 内：体部無釉，見込み鉄釉後一部灰色釉(灰釉)	淡灰黄色	
78	陶器蓋	口縁部 1/3		外：口縁部付着物，灰釉， 内：無釉，輪状の熔着痕	灰色	
79	陶器蓋	天井部 1/2	口径：4.8 cm	外：天井部緑灰色釉(灰釉)， 内：無釉	灰色	
80	陶器蓋	つまみ部完存	つまみ部径：2.2 cm	外：イッチンによる文様，灰釉，天井部に円 錐ピン付着， 内：無釉	灰色	
81	陶器蓋	天井部 1/4	天井部径：13.2 cm， 口径：10.6 cm	外：イッチンによる文様，灰釉 内：無釉	灰色	
82	陶器蓋	天井部 1/2	口径：6.2 cm	外：天井部灰釉，イッチンによる文様， 内：無釉	淡灰色	
83	陶器土瓶	体部 1/6	口径：8.0 cm	外：鉄釉，口縁部無釉， 内：鉄釉	灰色	
84	陶器土瓶	体部 1/4	口径：8.0 cm	外：淡灰色釉(灰釉)，口縁部無釉， 内：淡灰緑色釉(灰釉)	灰色	
85	陶器土瓶	口縁部 1/6	口径：7.6 cm	外：灰色釉(灰釉)，口縁部無釉， 内：口縁部無釉，体部上半灰色釉(灰釉)， 体部下半無釉	灰色	
86	陶器土瓶	口縁部 1/4	口径：8.4 cm	外：淡灰緑色釉，イッチンによる文様， 内：体部上半無釉，体部下半淡緑色釉	淡灰色	
87	陶器鍋？	底部完存	底径：6.4 cm	外：体部上半淡灰色釉(灰釉)，体部下半無 釉，底部無釉，脚部 3，輪状の焼き台付着， 内：淡灰緑色釉(灰釉)，目跡 3	淡黄灰色	
88	陶器鍋？	底部完存	底径：6.8 cm	外：体部淡緑灰色釉，底部無釉，脚部 3， 内：淡緑灰色釉，目跡 3	灰色	

番号	器 種	残存量	法 量	成形・調整等の特徴	胎土の色調	その他の特徴
89	陶器土瓶	底部破片		外:無釉 内:施釉	淡橙色	
90	陶器土瓶	底部完存	底径: 7.0 cm	外:体部上半淡灰緑色釉(灰釉), 底部無釉, 脚部3, 内:鉄釉, 見込み一部砂付着	淡灰色	
91	陶器行平鍋	体部1/3	底径: 6.0 cm	外:体部飛鉋, 鉄泥, 脚部現存1, 内:灰釉	灰色	
92	陶器行平鍋	口縁部1/8	口径: 16.8 cm	外:飛鉋, 鉄泥, 内:口縁部鉄泥, 体部灰釉	暗灰色	
93	陶器行平鍋	体部1/4	底径: 6.8 cm	外:体部上半飛鉋, 鉄泥, 体部下半ヘラケズ リ, 内:灰釉, 見込み目跡現存1	淡灰褐色	
94	陶器鍋	体部1/4	口径: 16.0 cm 器高: 6.9 cm 底径: 7.0 cm	外:口縁部~体部上半鉄釉釉, 体部下半~ 底部無釉, 脚部現存2(推定4), 内:鉄釉, 底部目跡現存1	淡灰褐色	
95	陶器鉢	口縁部1/4	口径: 18.6 cm	外:灰釉, 内:灰釉	淡灰色	
96	陶器鉢	口縁部1/3	口径: 14.6 cm	口縁部輪花状, 外:淡緑灰色釉(灰釉), 底部無釉, 内:淡緑灰色釉(灰釉) 後口縁部一部鉄釉	淡灰黄色	
97	陶器鉢	底部1/3	底径: 9.4 cm	外:体部灰釉, 体部別個体付着のため剥離 (1箇所), 底部無釉, 内:灰釉, 目跡現存1	淡黄灰色	
98	陶器甕	口縁部1/4	口径: 27.0 cm	外:淡灰緑色釉(灰釉) 後肩部暗緑色釉(鉄 釉?), 内:淡灰緑色釉(灰釉)	灰白色	
99	陶器甕	口縁部1/6	口径: 25.0 cm	外:褐色釉(鉄釉), 内:褐色釉(鉄釉)	淡灰色	
100	陶器甕	底部1/5	底径: 16.0 cm	外:体部褐色釉(鉄釉), 底部無釉, 内:褐色釉(鉄釉)	灰色	
101	陶器甕	口縁部1/6	口径: 25.2 cm	外:陰刻文様, 白色釉(灰釉) 後一部青緑色 釉(銅緑釉), 内:口縁部白色釉(灰釉), 体部無釉	淡橙灰色	
102	陶器甕	口縁部1/6	口径: 19.2 cm	外:体部陰刻文様, 淡緑灰色釉(灰釉) 後一 部青白色釉(銅緑釉), 内:口縁部淡緑灰色釉(灰釉) 後一部青白色 釉(銅緑釉), 体部無釉	乳灰色	
103	陶器甕	口縁部1/8	口径: 16.8 cm	外:灰緑色釉(灰釉) 後一部銅緑釉, 内:口縁部灰緑色釉(灰釉) 後一部銅緑釉, 口縁部一部付着物, 体部無釉	乳灰色	
104	陶器甕	体部1/6	底径: 14.8 cm	外:体部陰刻文様, 淡灰緑色釉(灰釉) 後一 部鉄釉, 底部鉄泥, 無釉, 内:鉄泥, 無釉	淡灰黄色	
105	陶器水甕	口縁部1/10	口径: 32.2 cm	外:陰刻文様, 灰釉 後一部鉄釉, 内:透明釉	淡黄灰色	
106	陶器水甕	口縁部破片		外:陰刻文様, 淡灰色釉(灰釉) 後一部鉄釉, 内:淡灰色釉(灰釉)	淡灰色	
107	陶器水甕	底部1/6	底径: 19.0 cm	外:陰刻文様, 体部灰色釉, 高台部~底部無釉, 内:灰色釉, 見込み団子状(径4cm)の粘土 塊現存1, 砂	淡灰色	
108	陶器水甕	底部1/4	底径: 22.4 cm	外:体部陰刻文様, 淡黄灰色釉(灰釉) 後一 部銅緑・鉄釉, 内:淡黄灰色釉, 目跡(砂) 現存2(推定4)	淡黄灰色	
109	陶器水甕	底部1/3	底径: 19.4 cm	外:体部陰刻文様, 淡緑灰色釉(灰釉) 後一 部鉄釉, 底部無釉, 内:淡緑灰色釉(灰釉), 見込み目跡(砂) 現 存2(推定3)	淡黄灰色	
110	陶器鉢	口縁部1/6	口径: 17.0 cm	外:体部陰刻文様, 口縁部~体部上半灰釉, 体部下半透明釉, 内:口縁部透明釉, 体部無釉	淡褐色	
111	陶器植木鉢	底部2/3	底径: 15.0 cm	中央部穿孔, 外:底部凹み3箇所, 無釉, 体部白色釉(灰 釉) 後一部銅緑釉, 体部下半透明釉, 内:無釉	淡橙灰色	

番号	器 種	残存量	法 量	成形・調整等の特徴	胎土の色調	その他の特徴
112	陶器植木鉢	口縁部 6/1	口径：29.2 cm	外：体部貼付文様，淡黄灰色釉（灰釉）後一部銅緑釉， 内：口縁部淡黄灰色釉（灰釉），体部無釉	淡黄灰色	



1/30,000



- 1 紀太家
- 2 吉金窯跡
- 3 平尾窯跡
- 4 横井窯跡 (斉藤窯)

第1図 位置図

約 1/23万

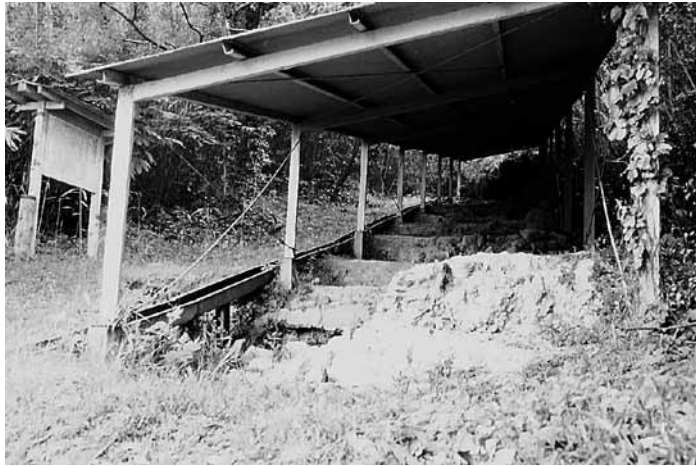


写真1 吉金窯跡



豊田 基「讃岐のお庭焼について」
『香川県文化財調査報告』9 より引用

第2図 昭和16年1月5日寺田貞治氏が
吉金窯跡で採取した破風高印



豊田 基「讃岐のお庭焼について」
『香川県文化財調査報告』9 より引用

写真2 富田焼手焙り



豊田 基「東讃の古窯に関する研究—特に富田焼について」
『文化財協会報』特別号7 より引用

第3図 富田西村焼物師助三郎焼土管



写真3 富田焼瓦形小花生
さぬき市大川町歴史民俗資料館所蔵



写真5 助三郎焼土管
さぬき市大川町歴史民俗資料館所蔵

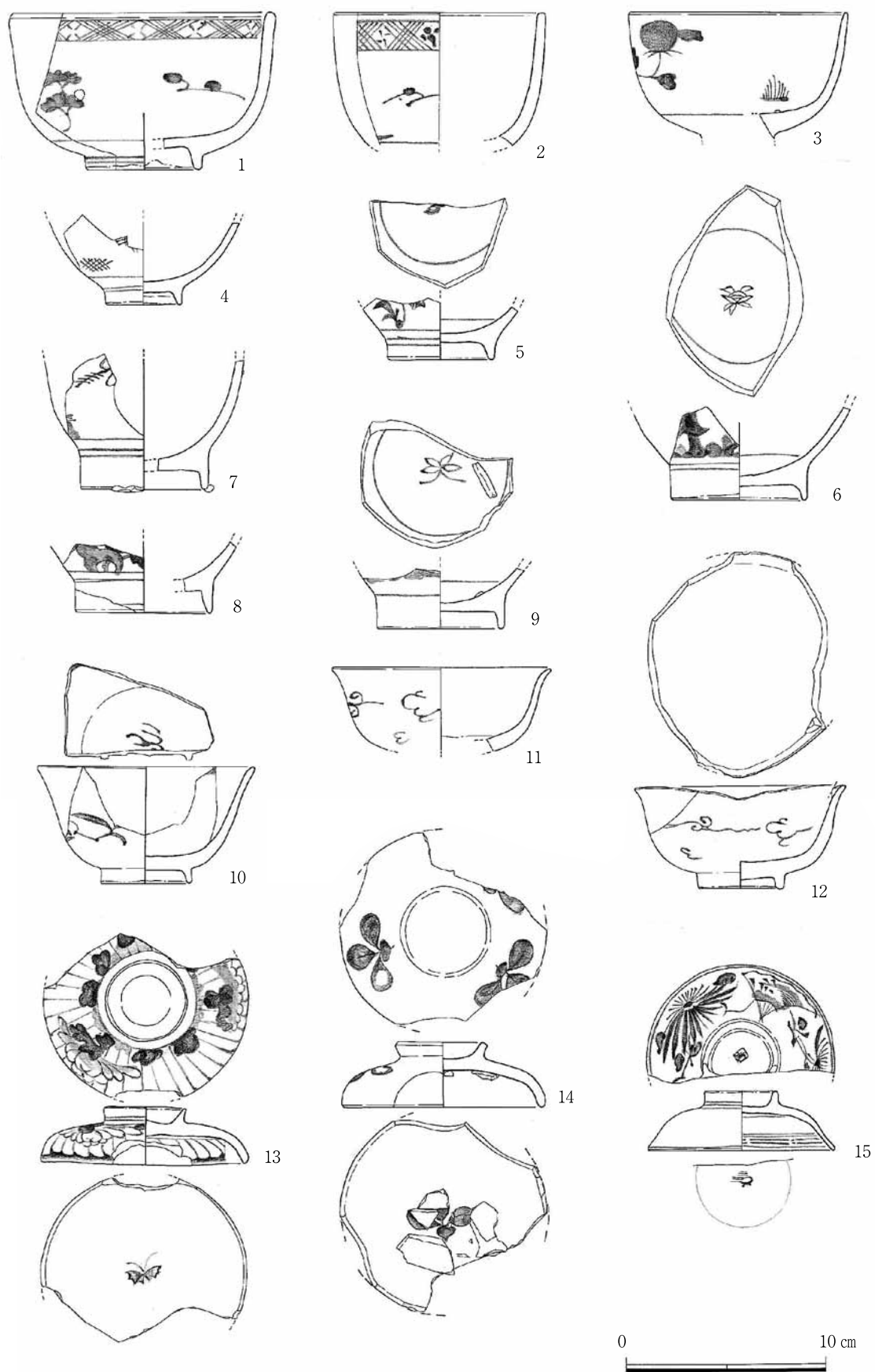


陶濱鑑定の裏箱書

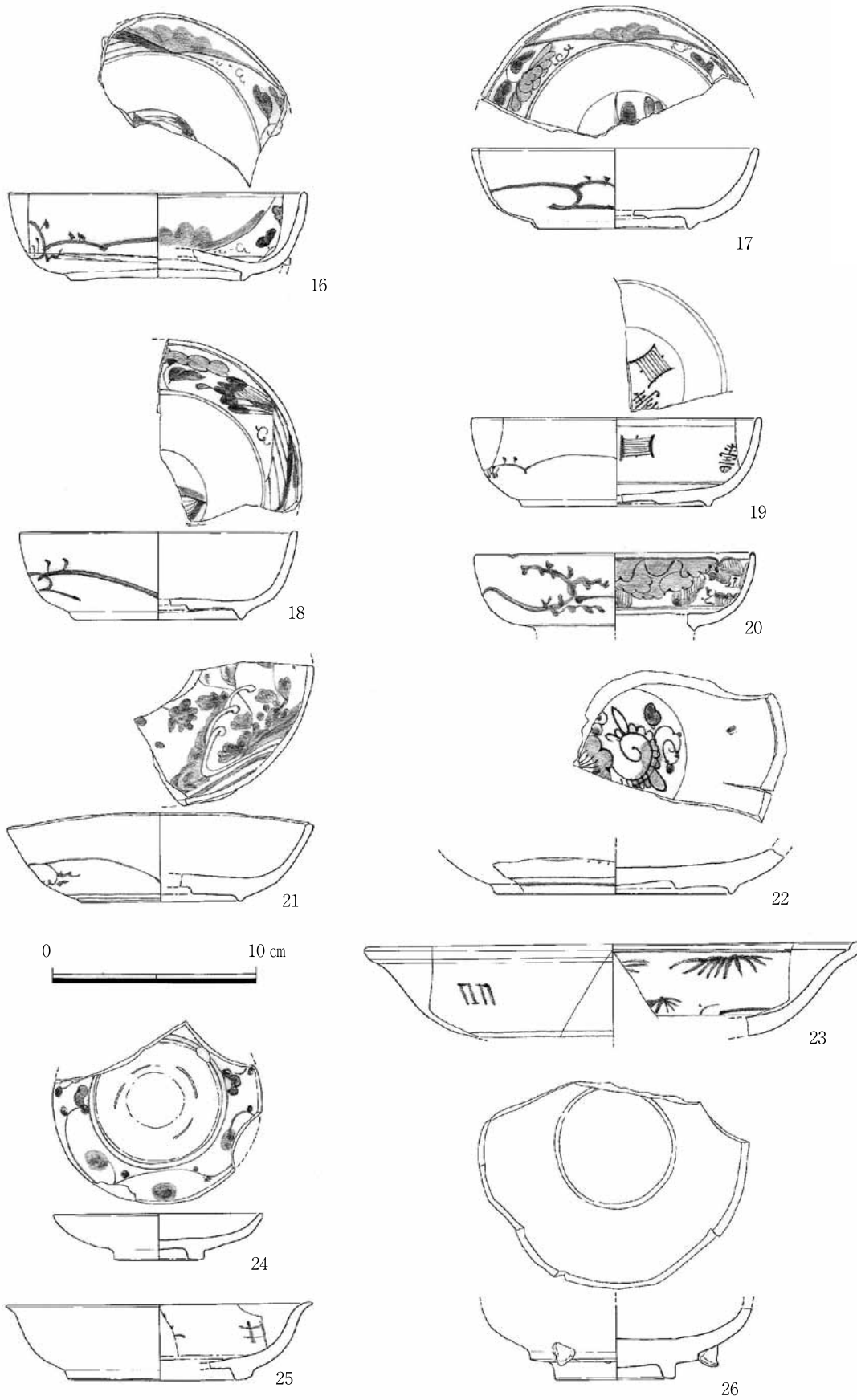


松山作茶入の印銘

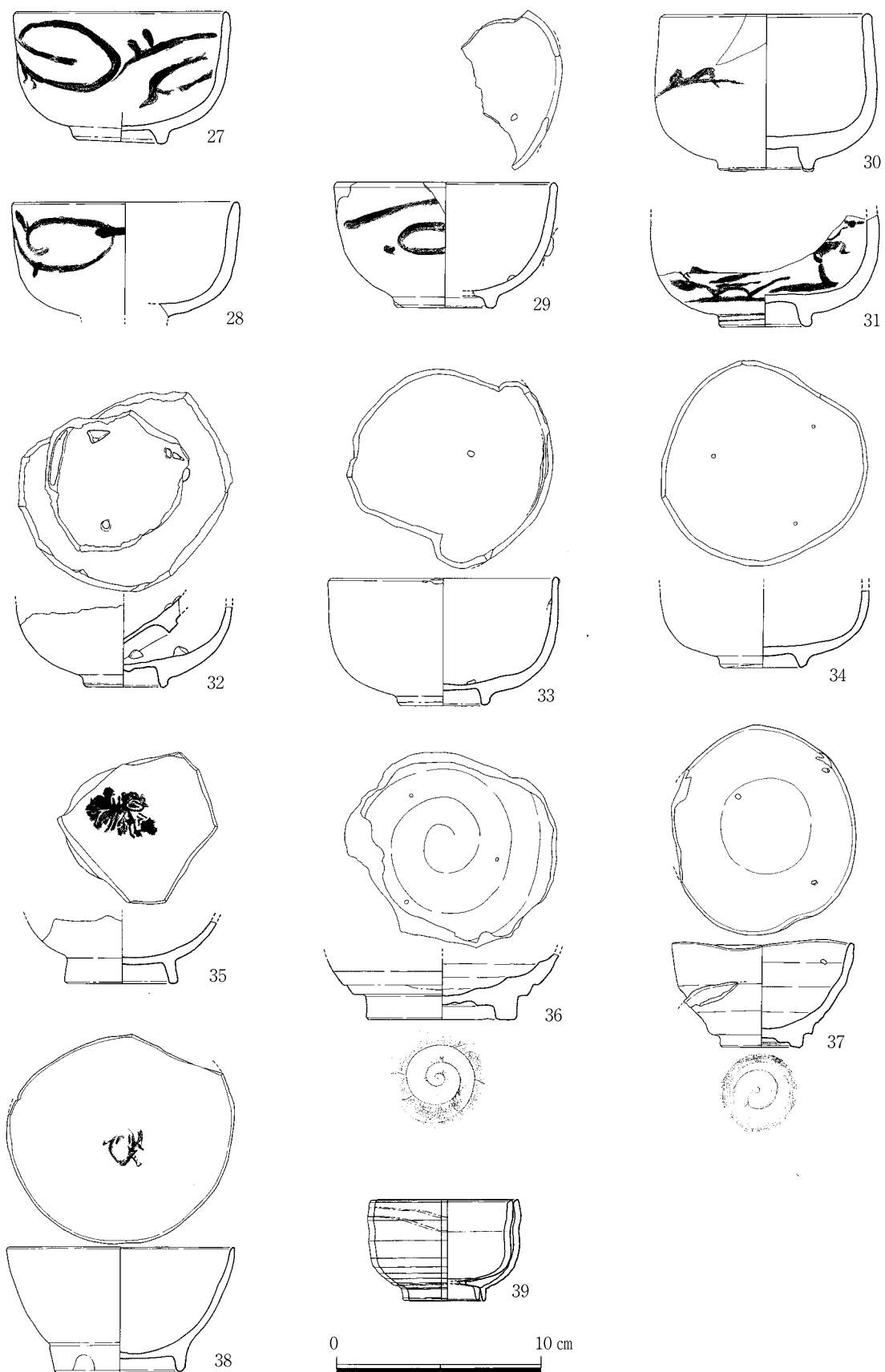
写真4 赤松松山作茶入



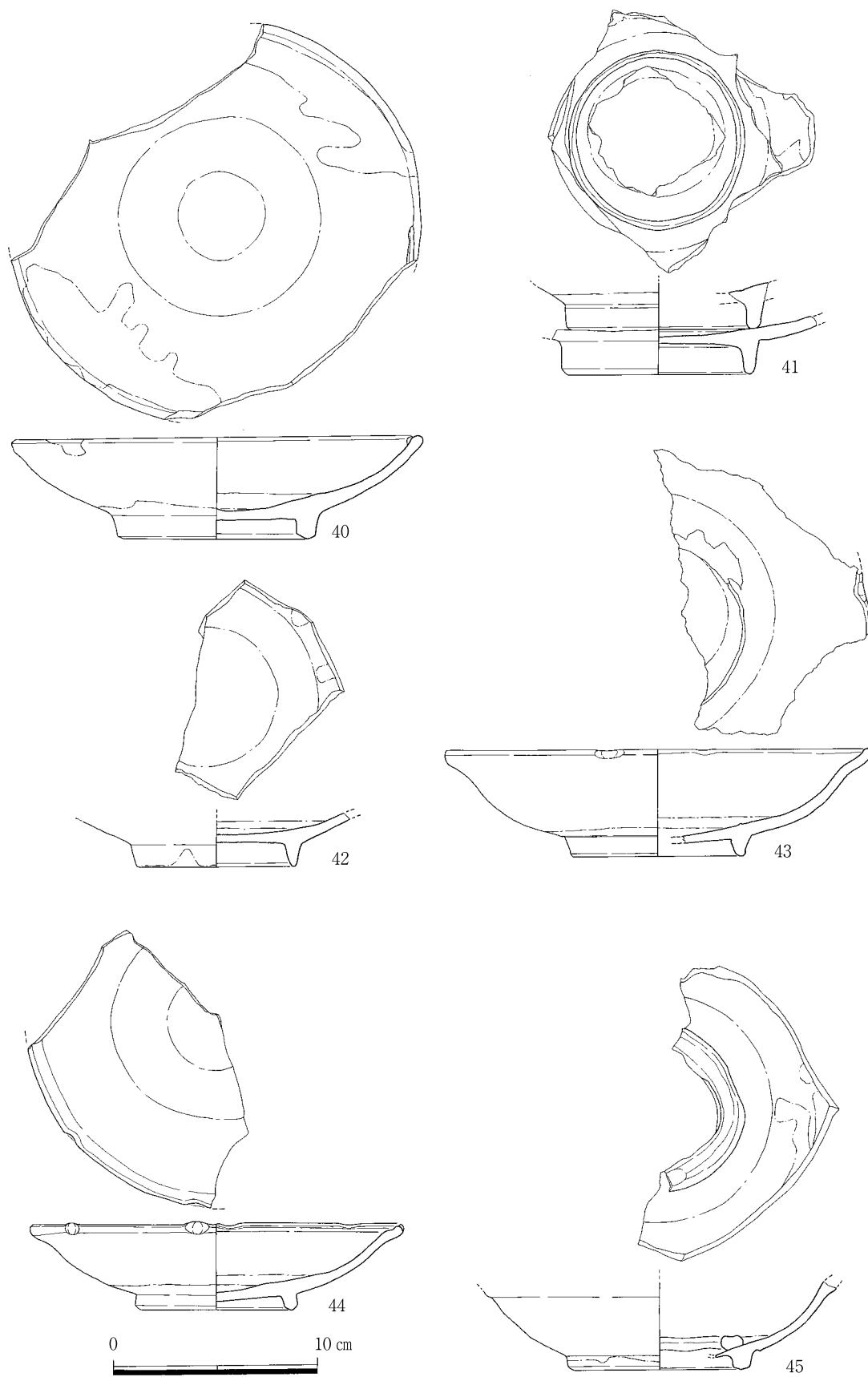
第4図 吉金窯跡出土遺物 1



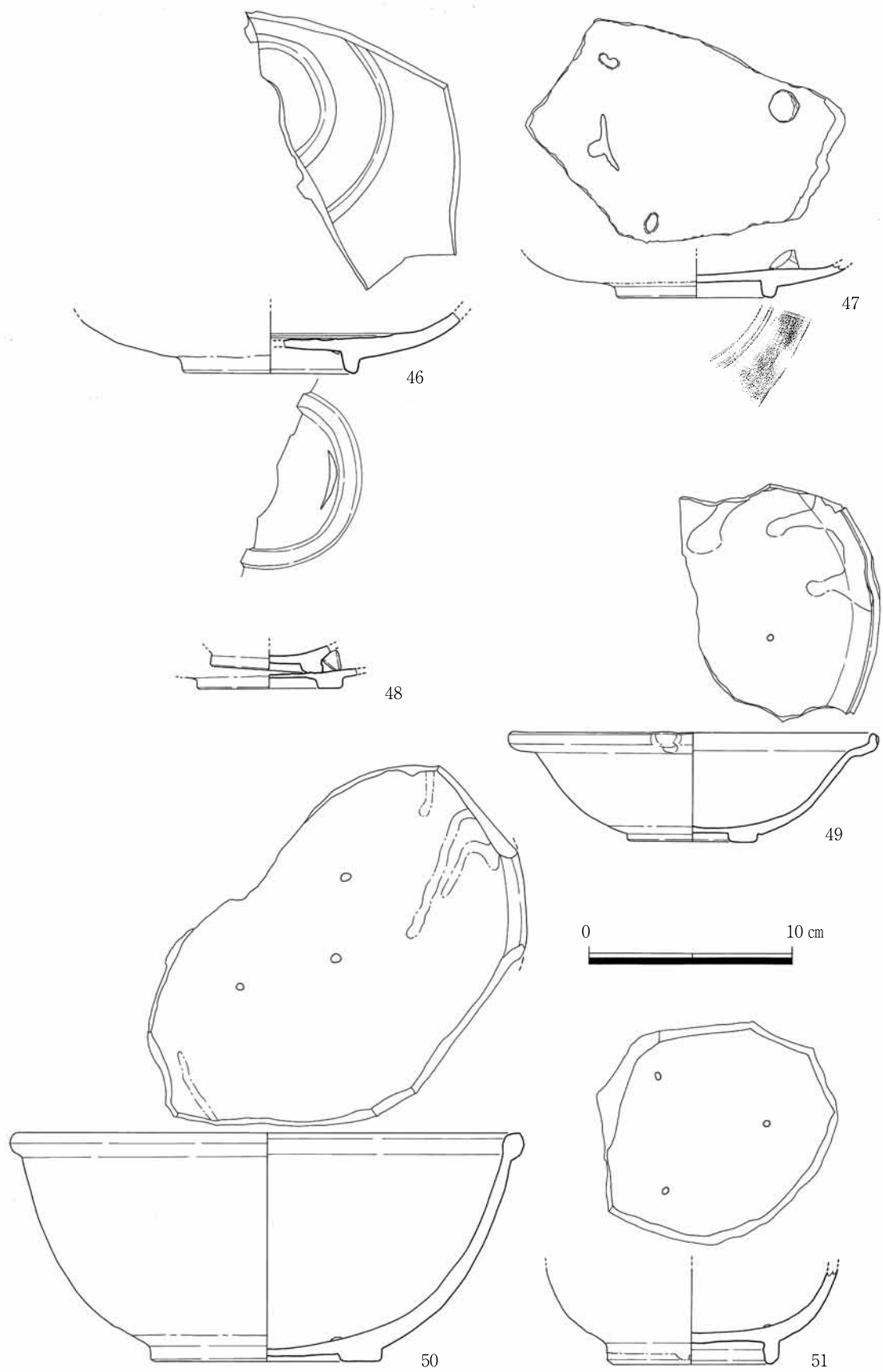
第5図 吉金窯跡出土遺物 2



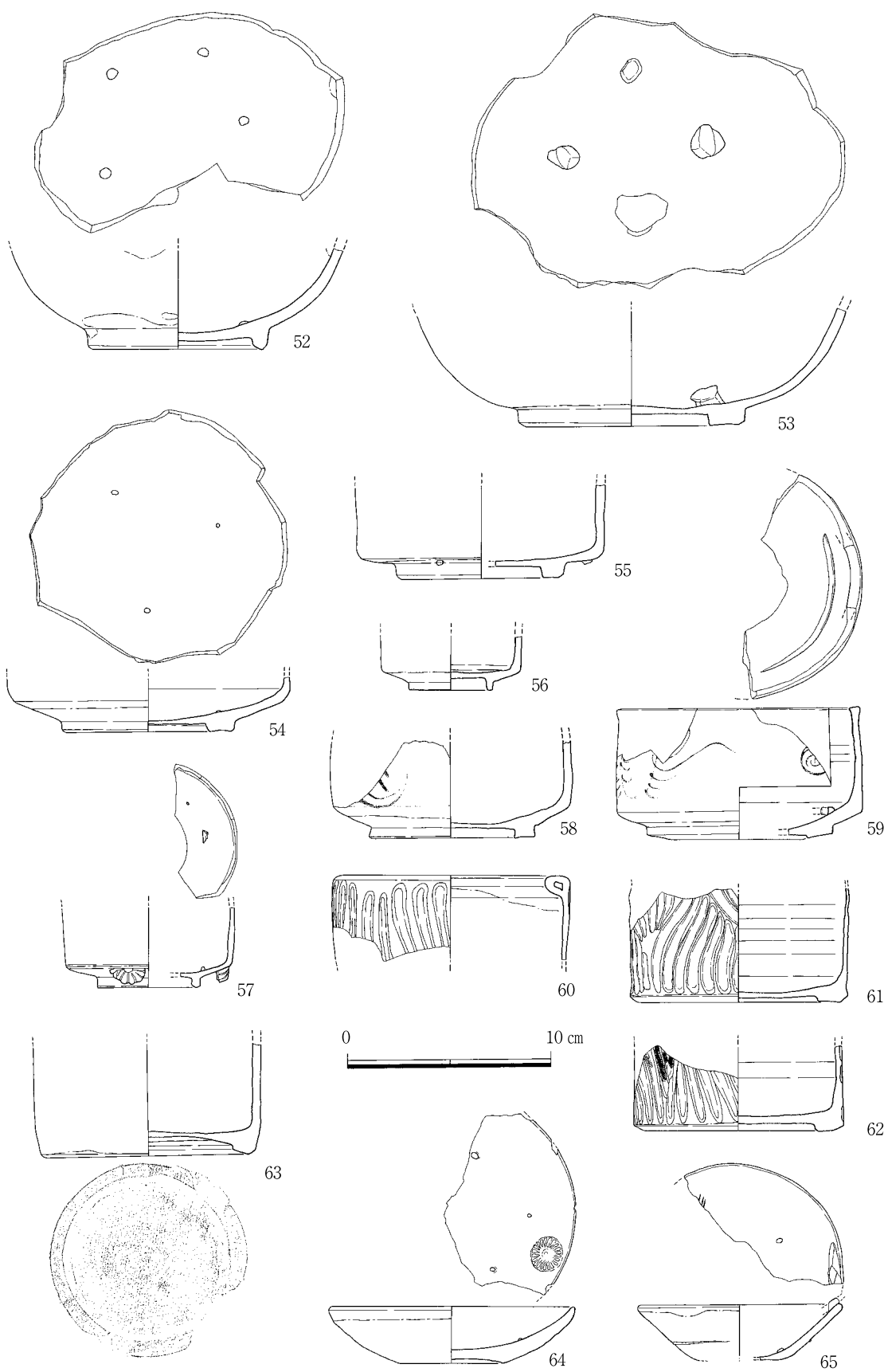
第6図 吉金窯跡出土遺物3



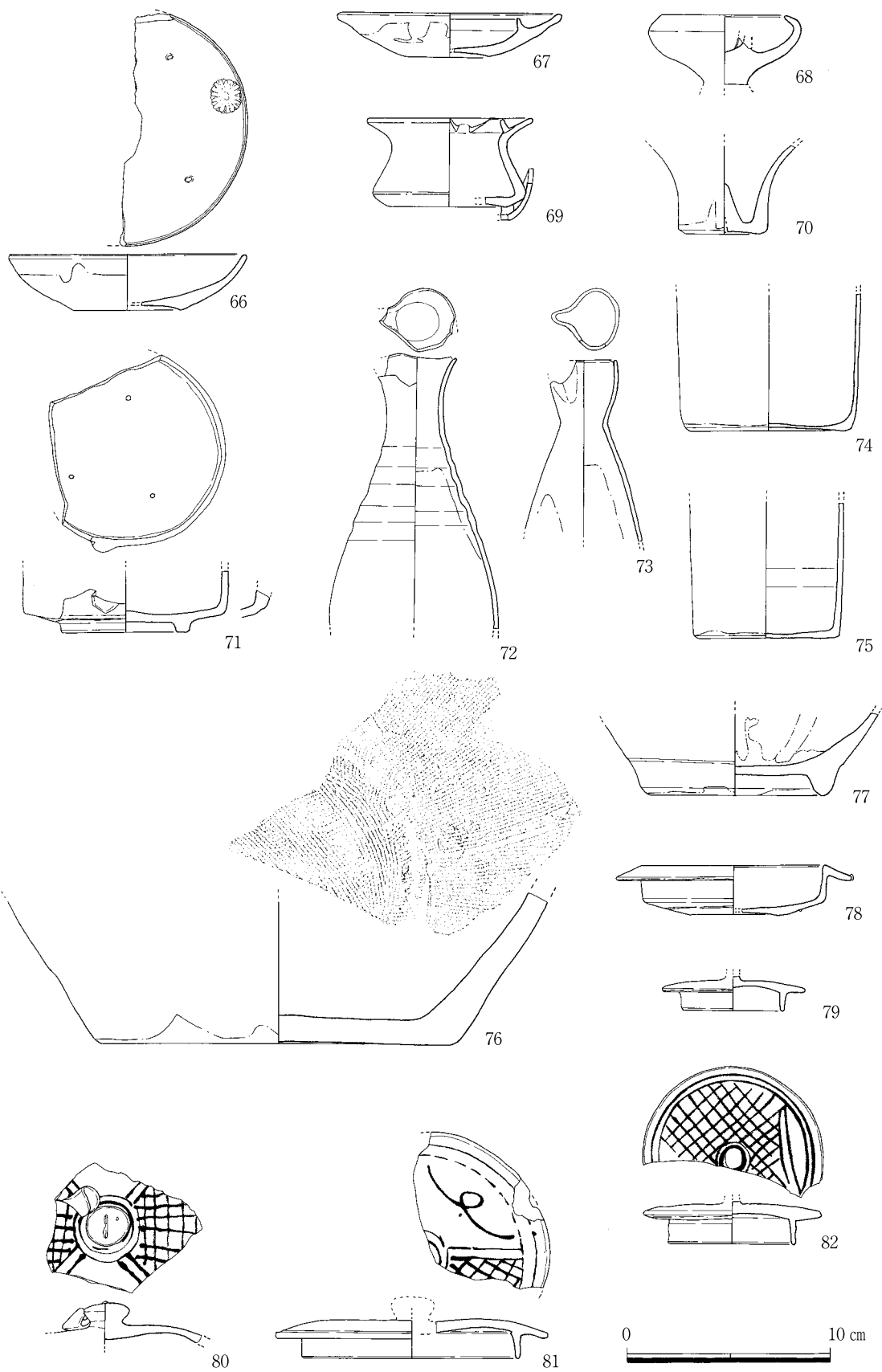
第7図 吉金窯跡出土遺物4



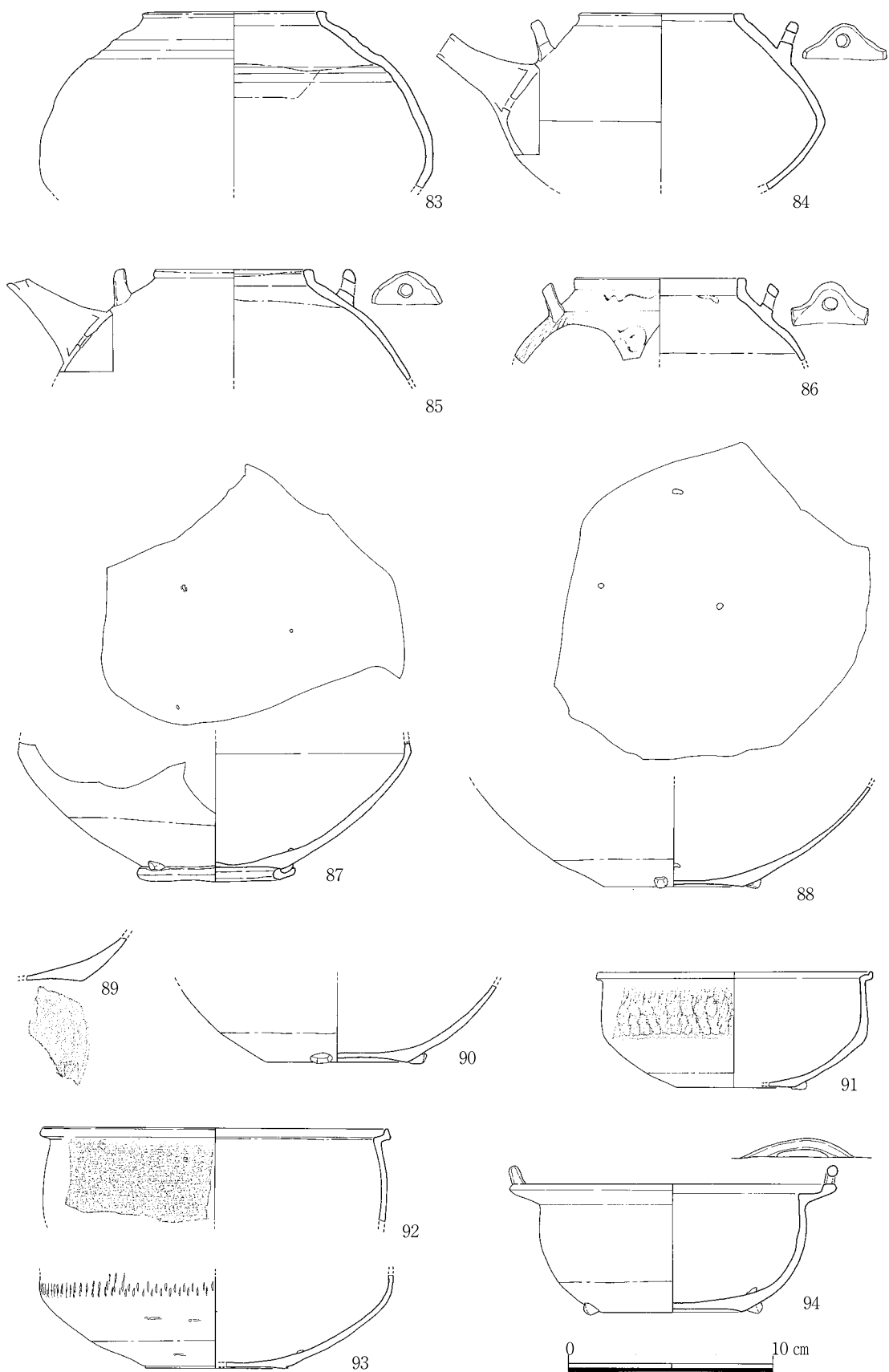
第 8 図 吉金窯跡出土遺物 5



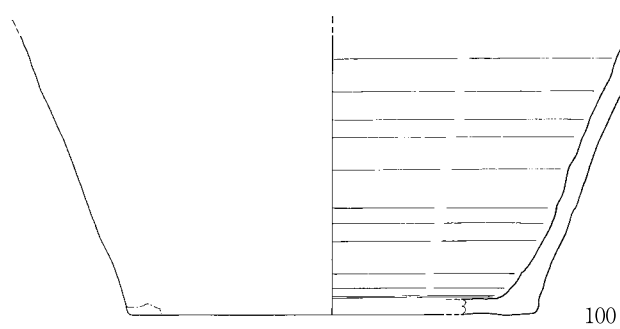
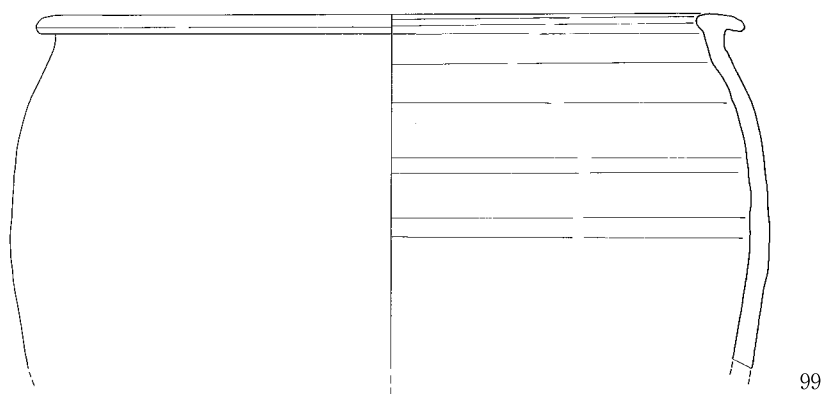
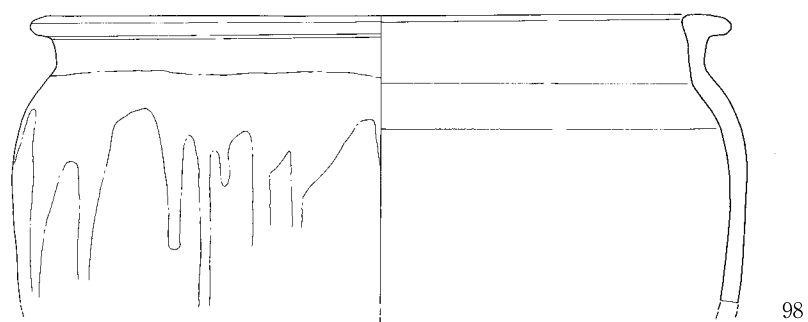
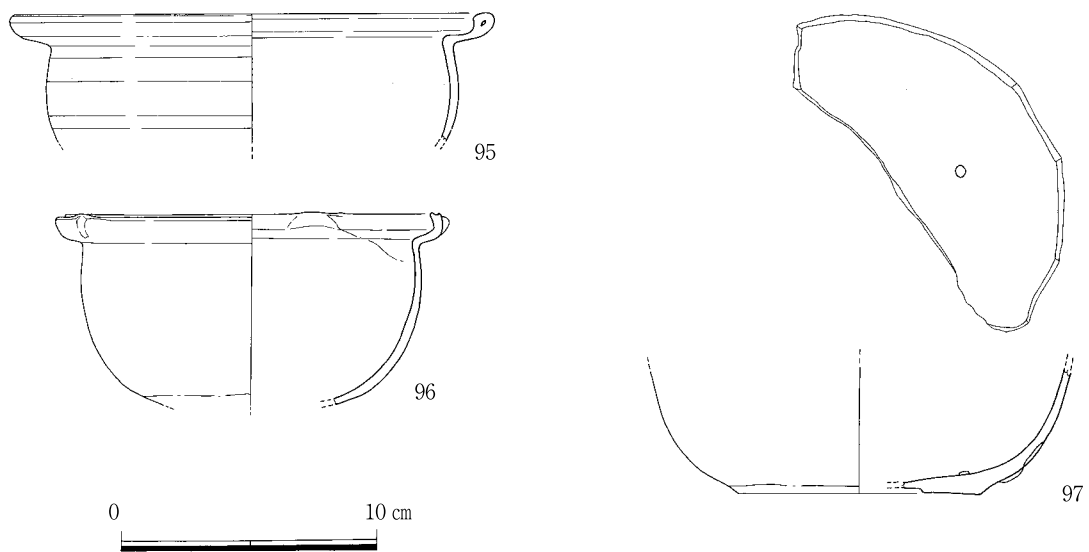
第9図 吉金窯跡出土遺物 6



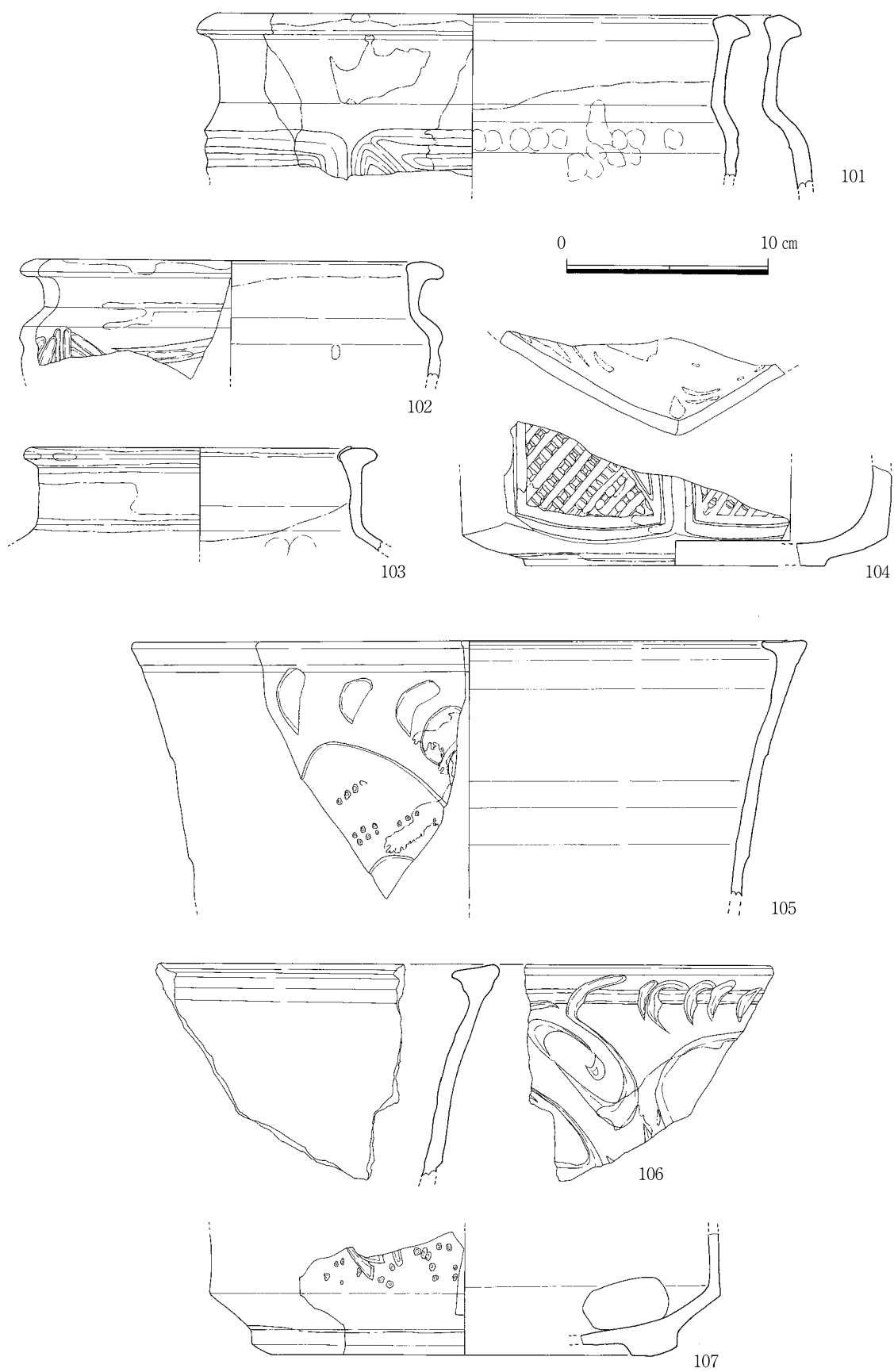
第10図 吉金窯跡出土遺物 7



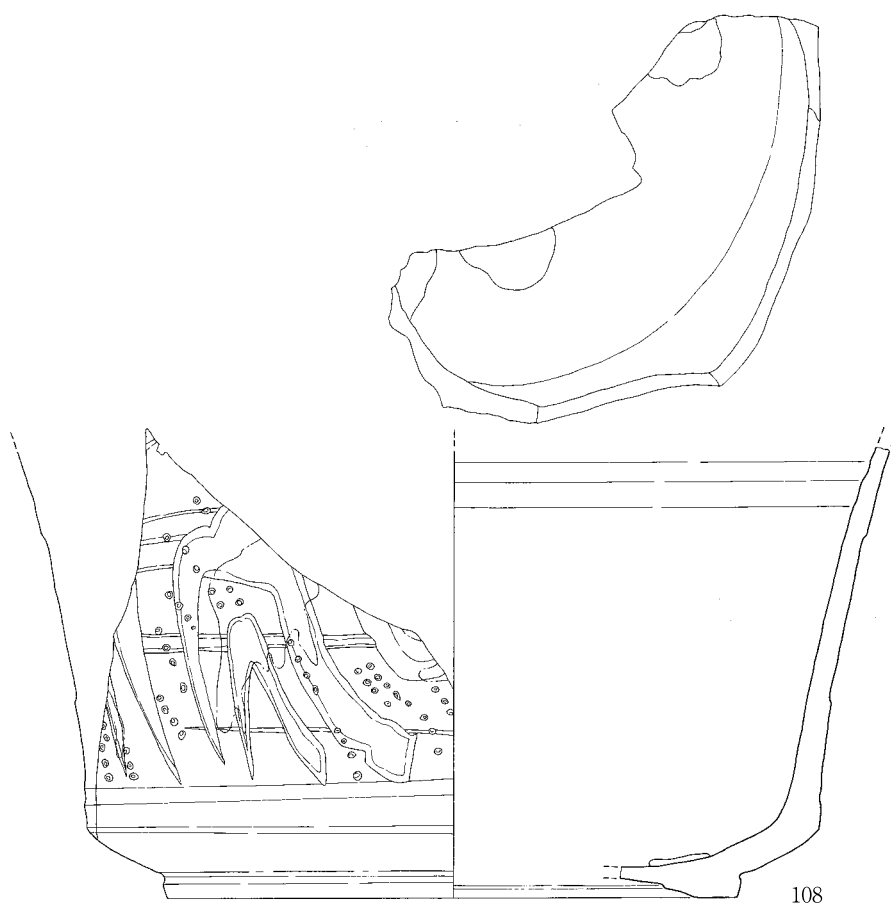
第11図 吉金窯跡出土遺物 8



第12図 吉金窯跡出土遺物 9



第13図 吉金窯跡出土遺物 10



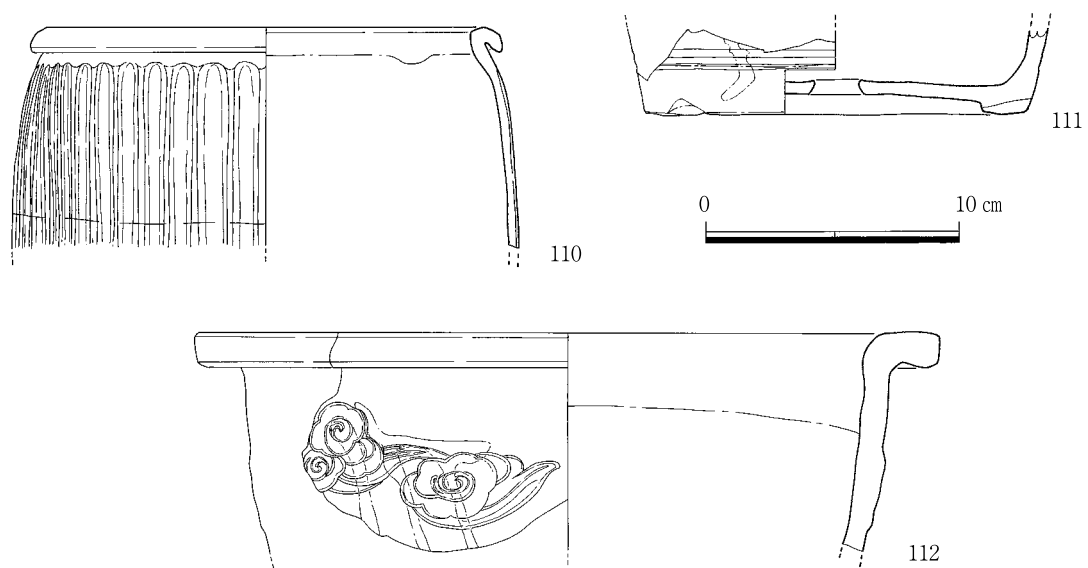
108



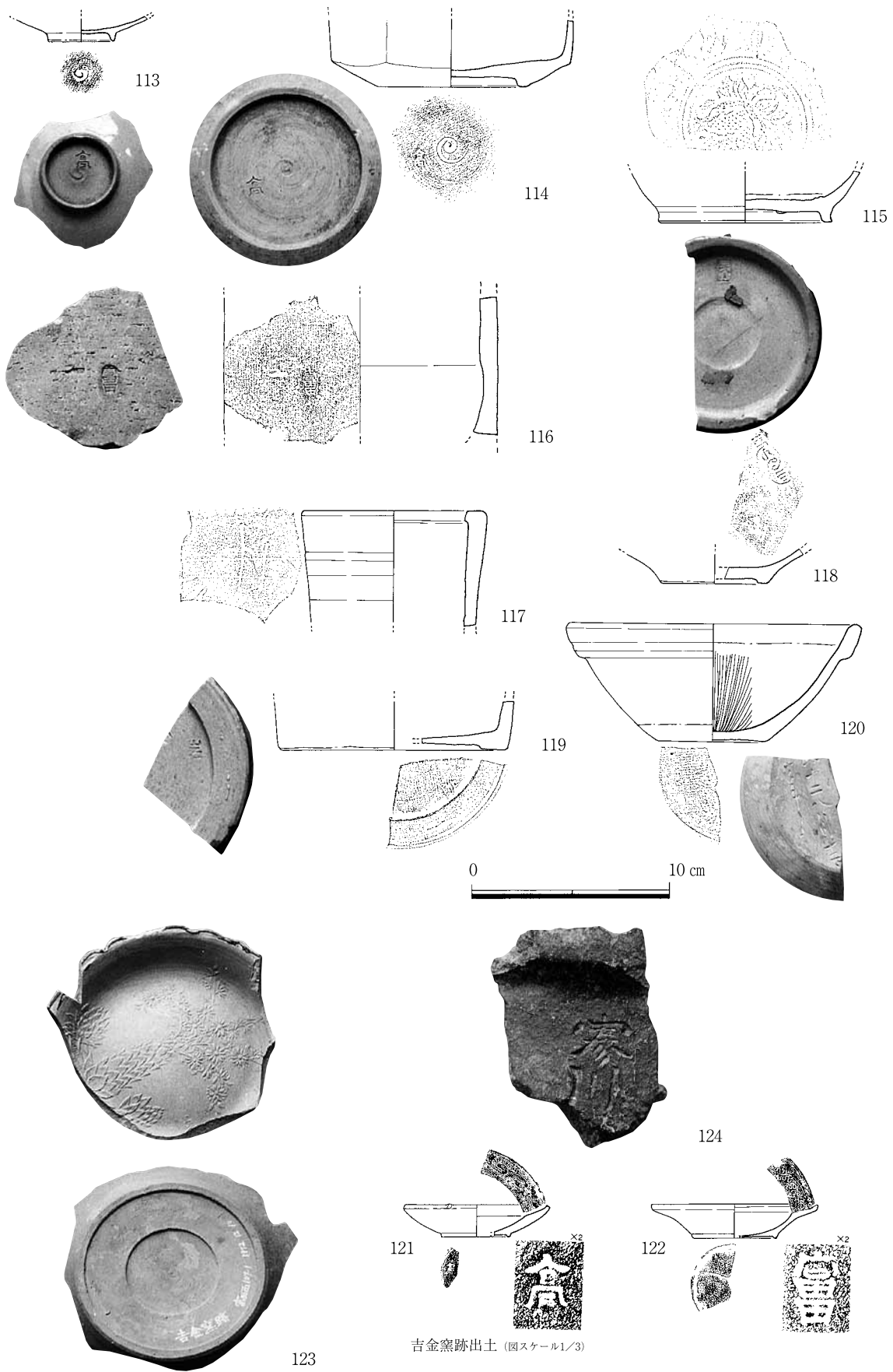
109



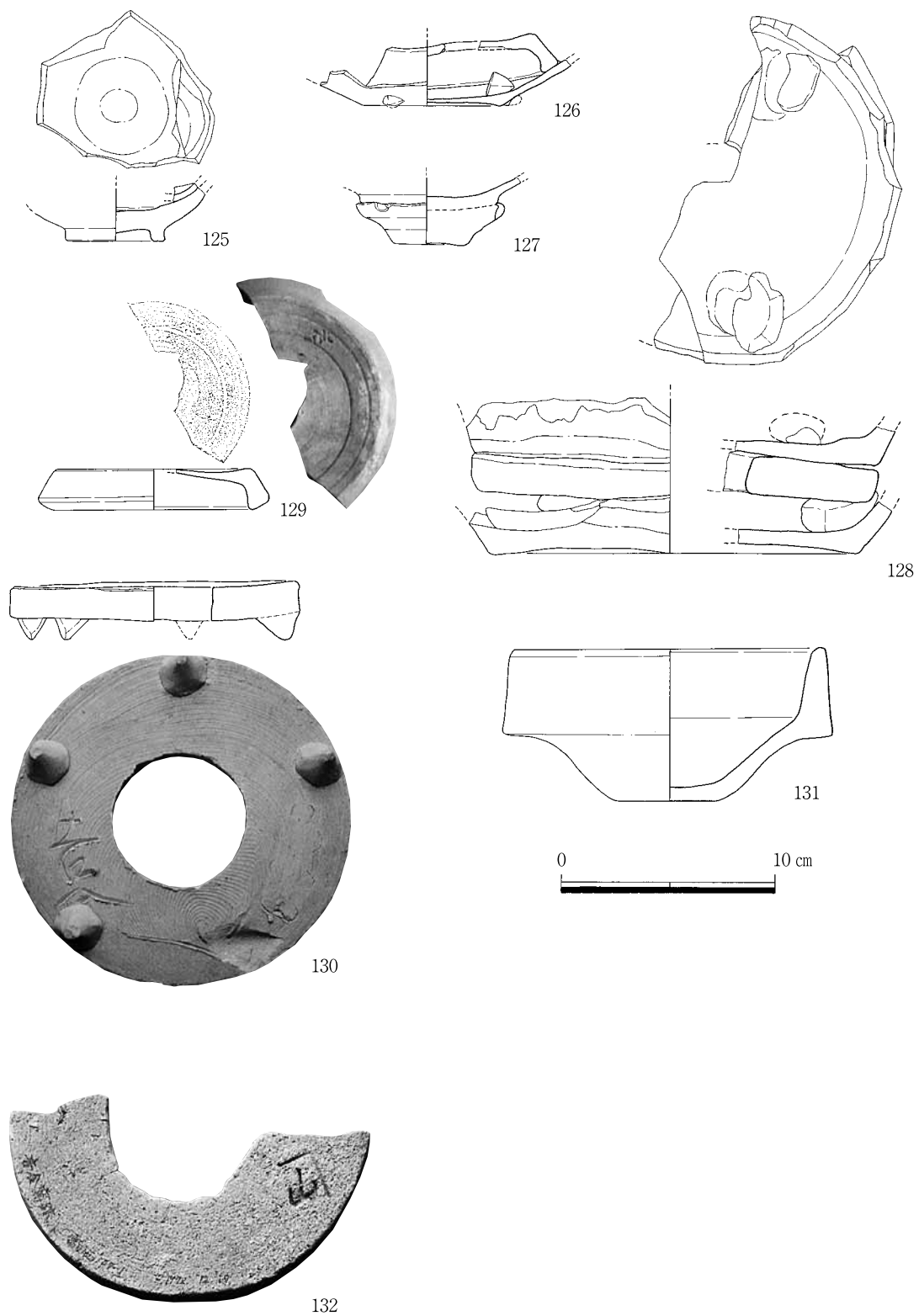
第14図 吉金窯跡出土遺物 11



第15図 吉金窯跡出土遺物 12



第16図 吉金窯跡出土遺物 13



第17図 吉金窯跡出土遺物 14

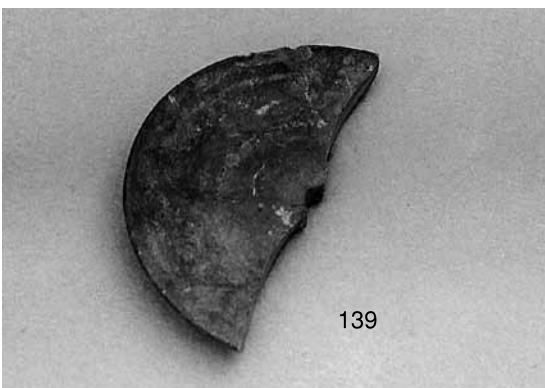
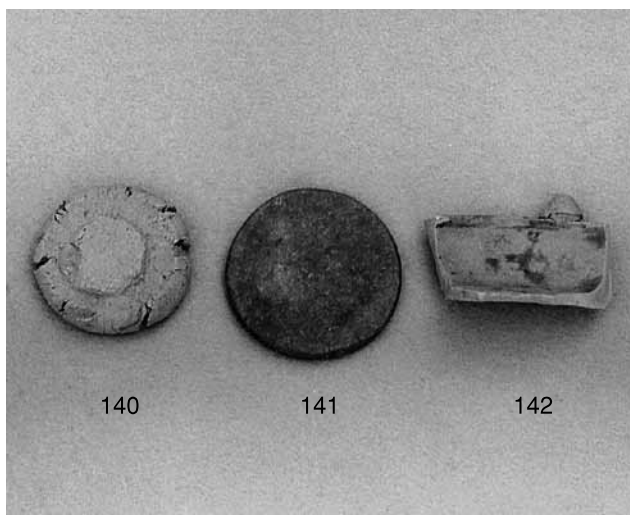
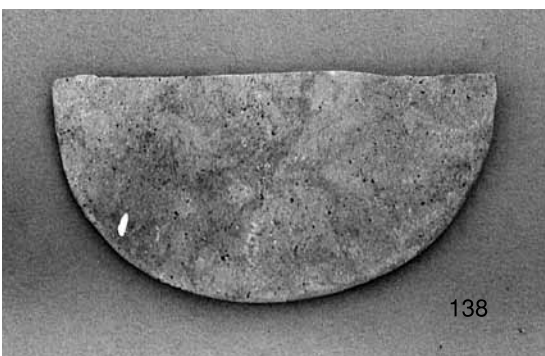
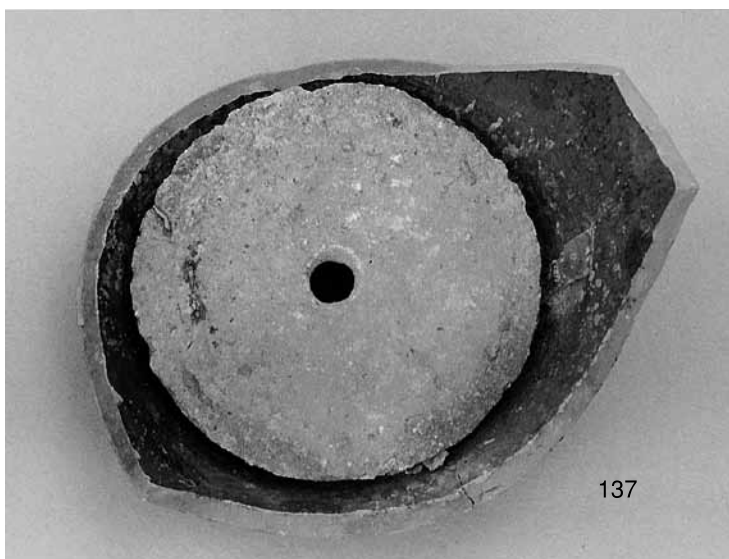
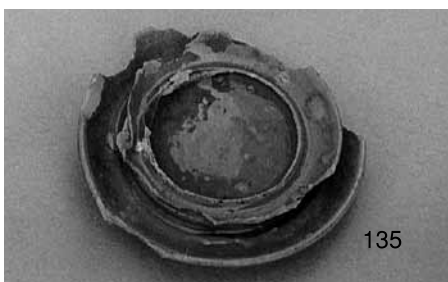
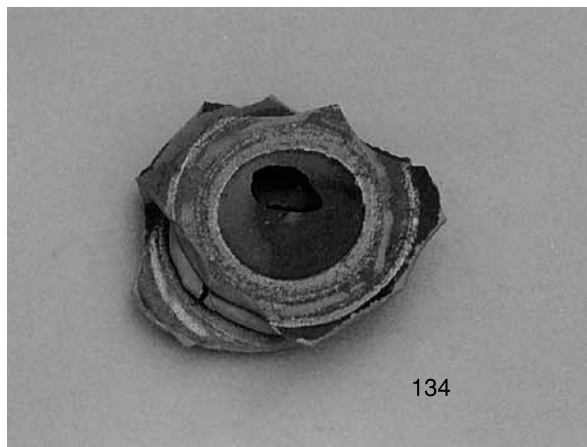
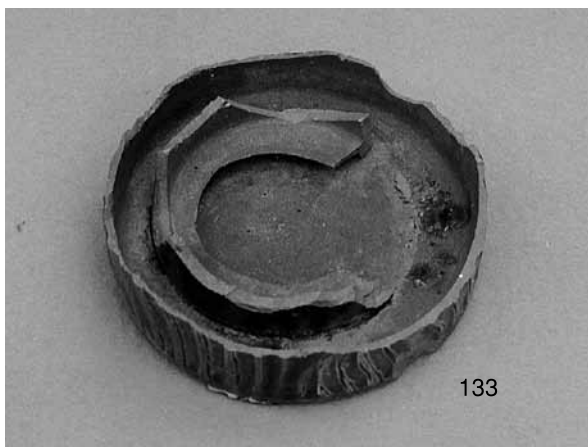


写真6 吉金窯跡出土遺物 15

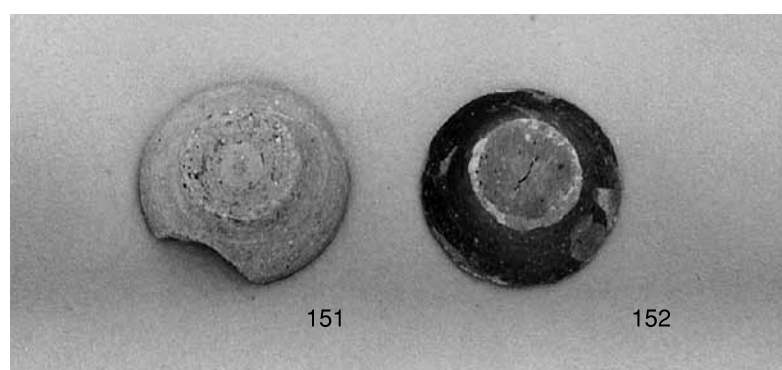
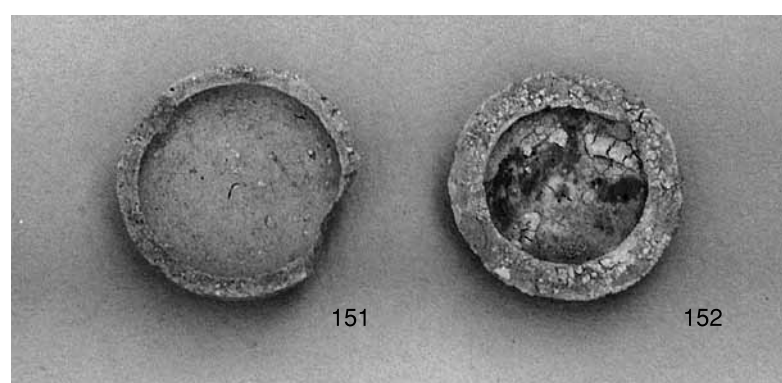
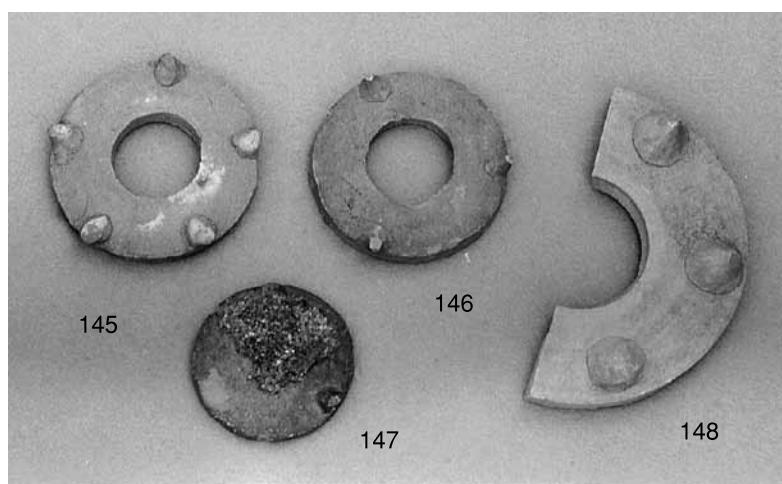
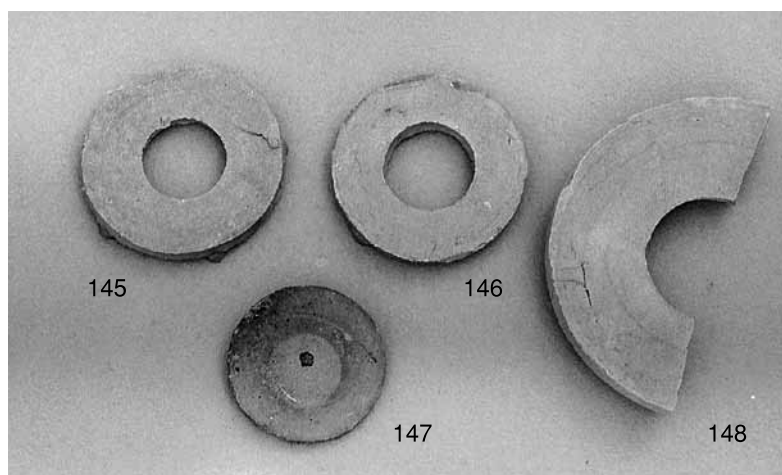
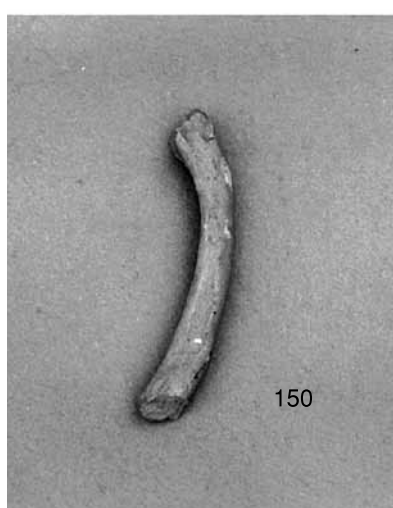
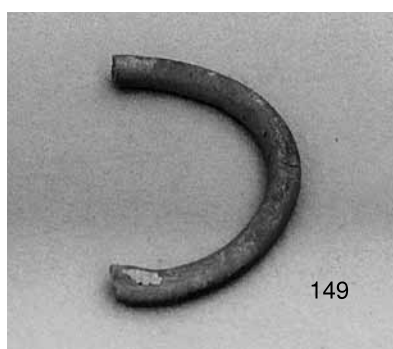
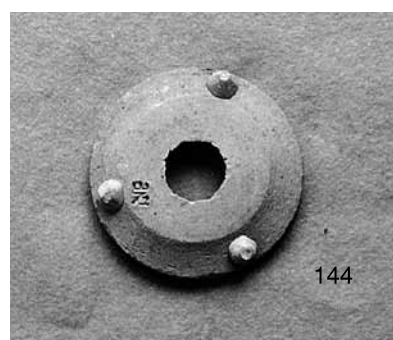
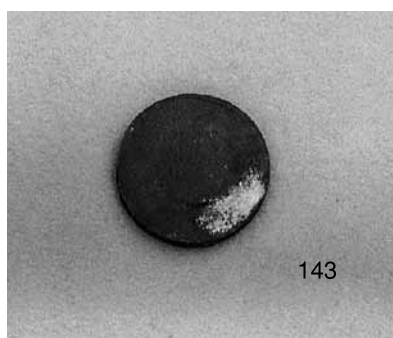


写真7 吉金窯跡出土遺物 16

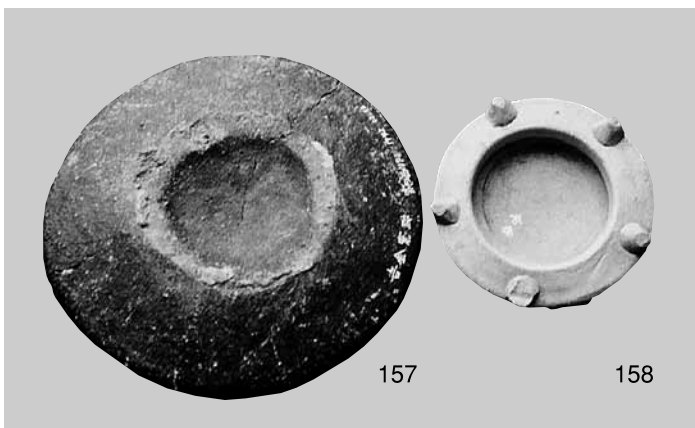
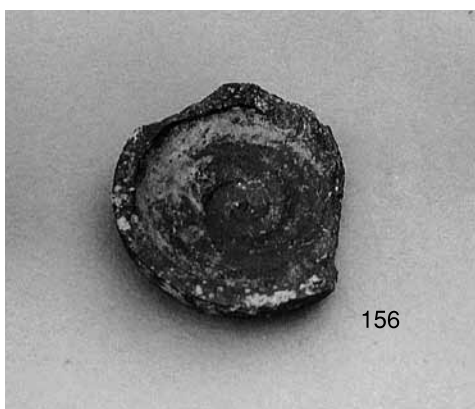
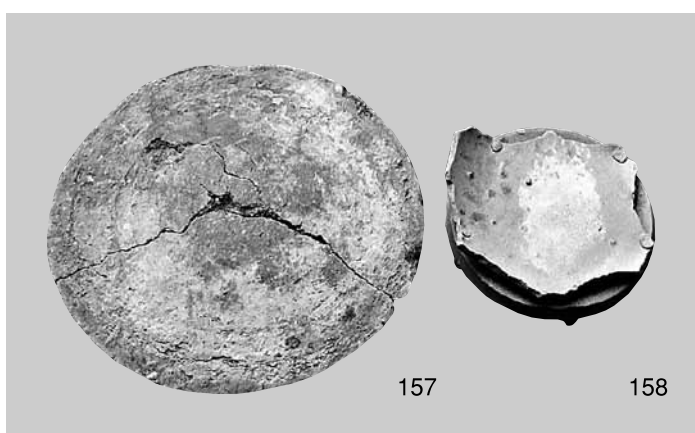
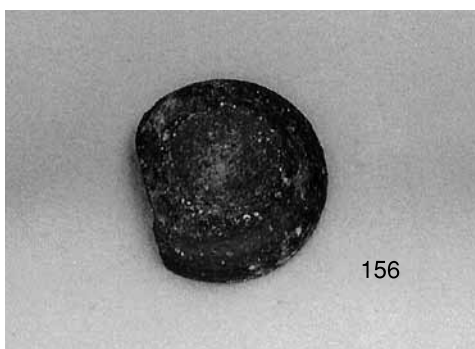
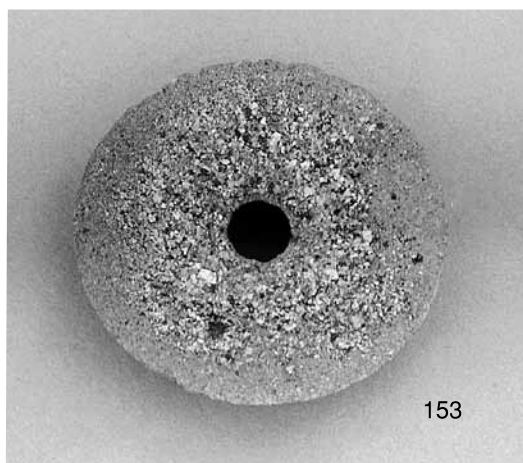
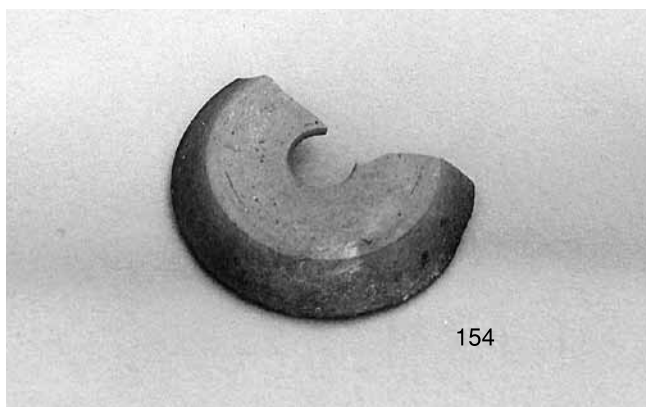
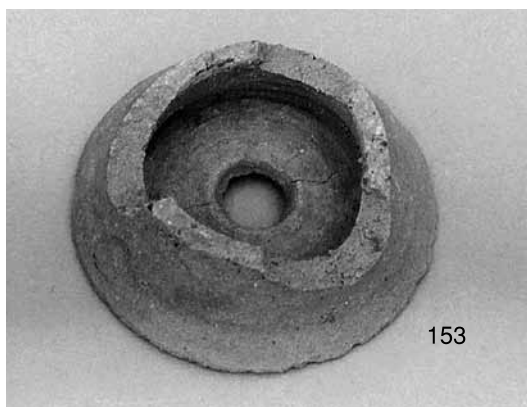


写真8 吉金窯跡出土遺物 17

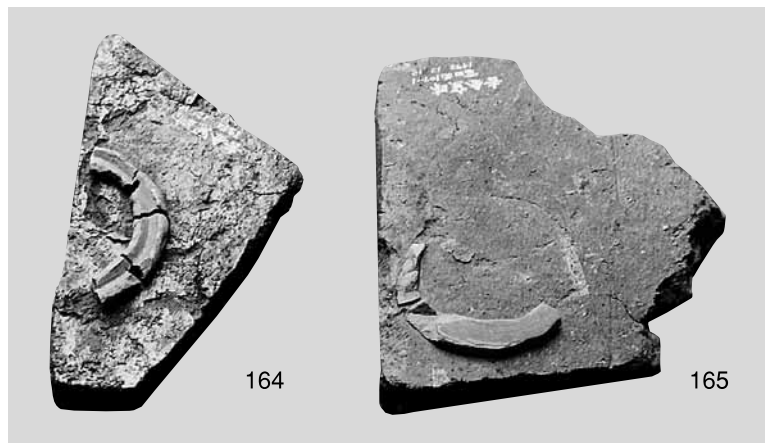
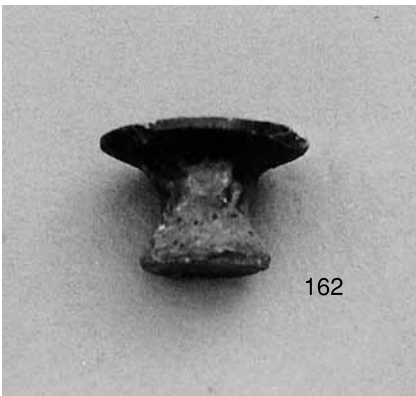
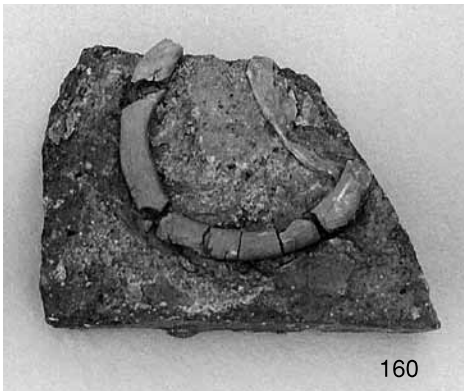
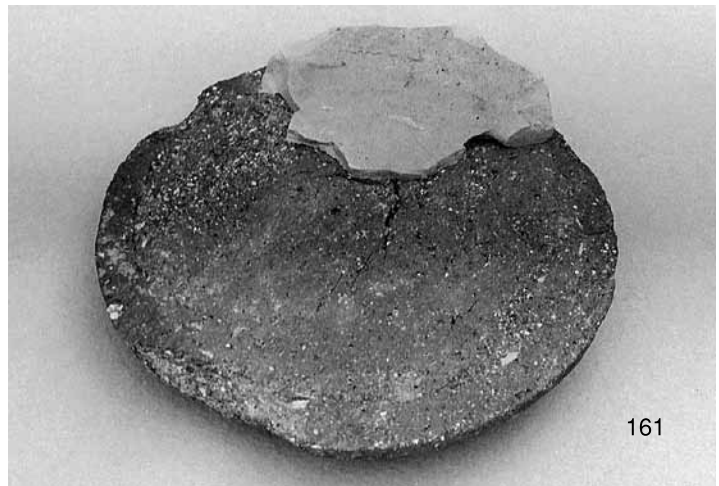
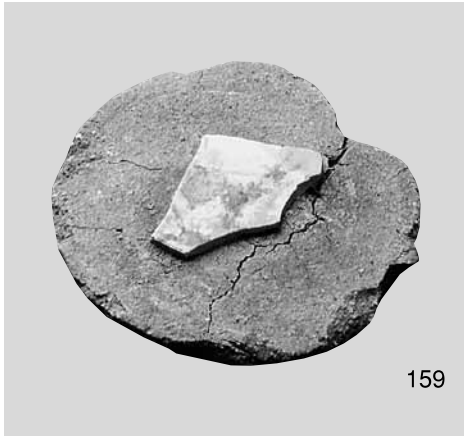


写真9 吉金窯跡出土遺物 18

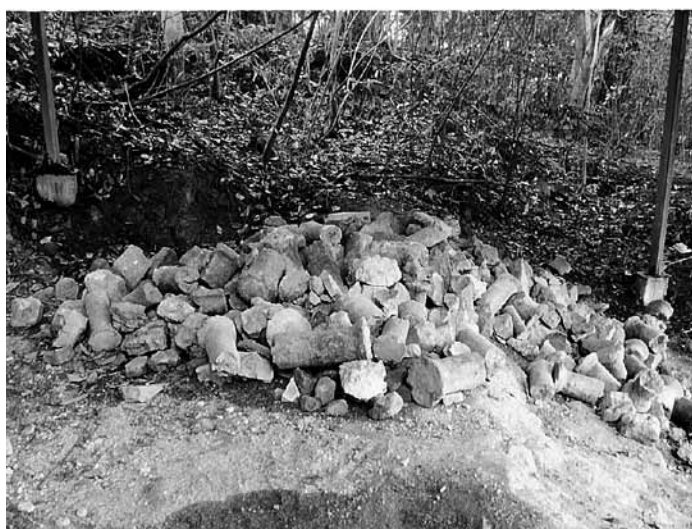
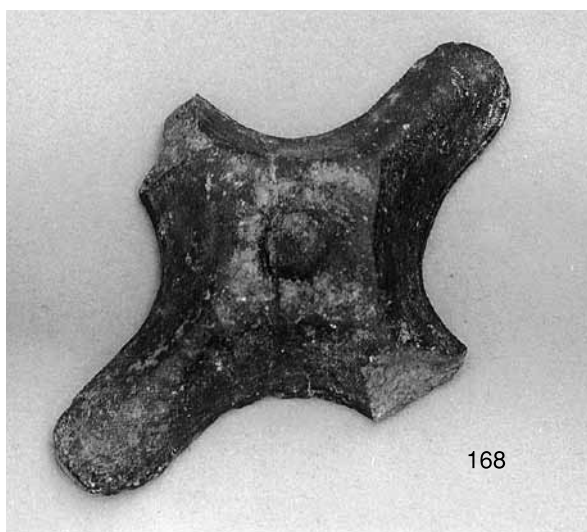
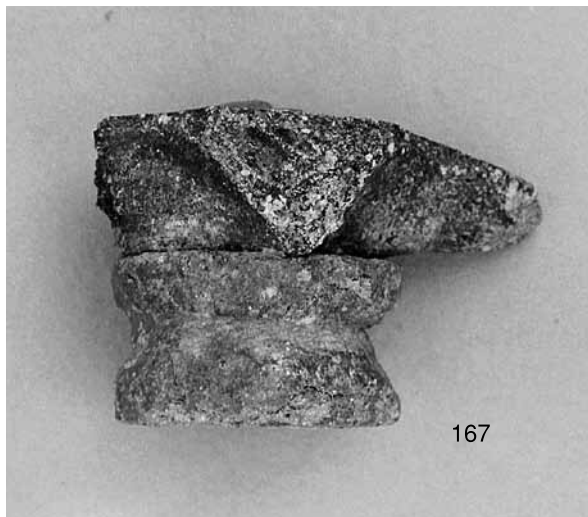


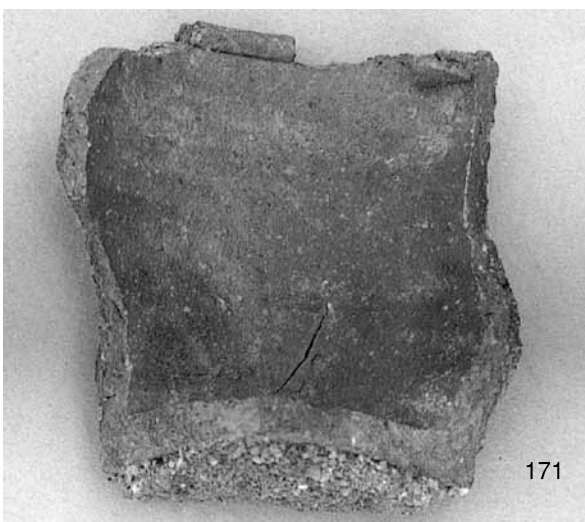
写真10 吉金窯跡出土遺物 19



170



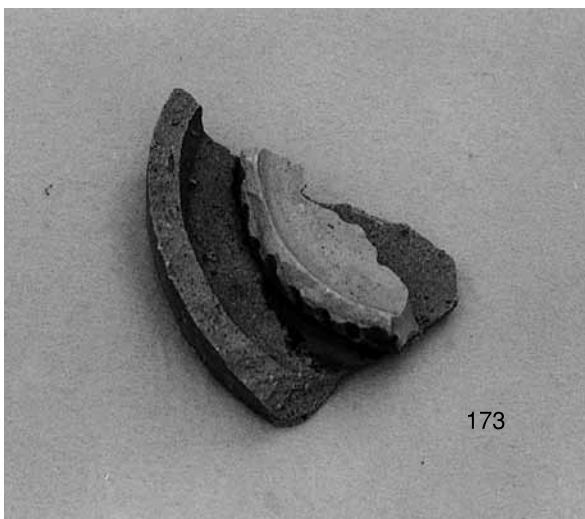
170



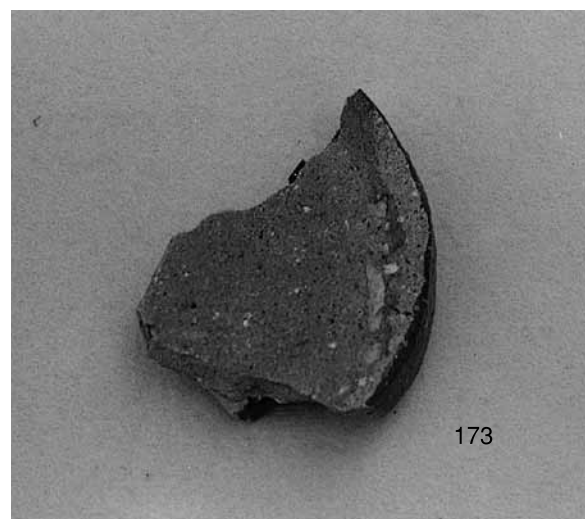
171



172

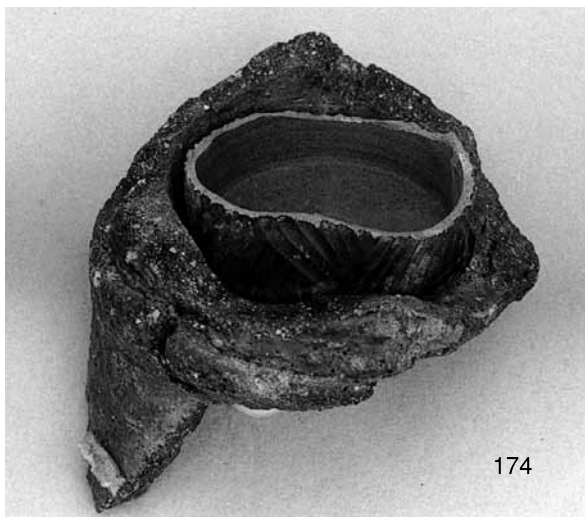


173

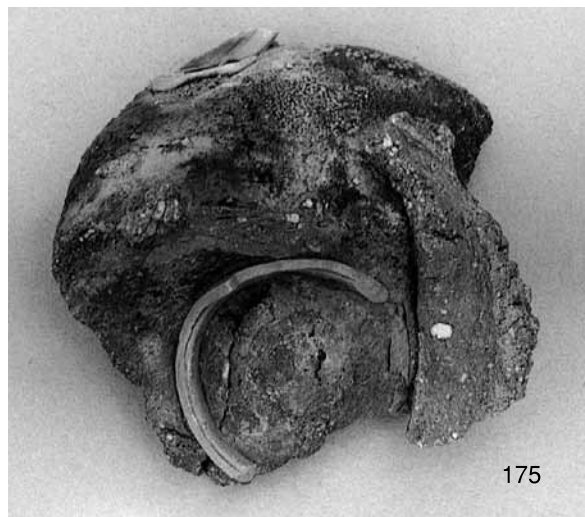


173

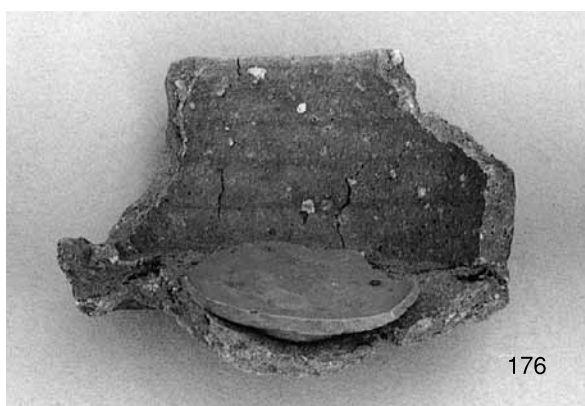
写真11 吉金窯跡出土遺物 20



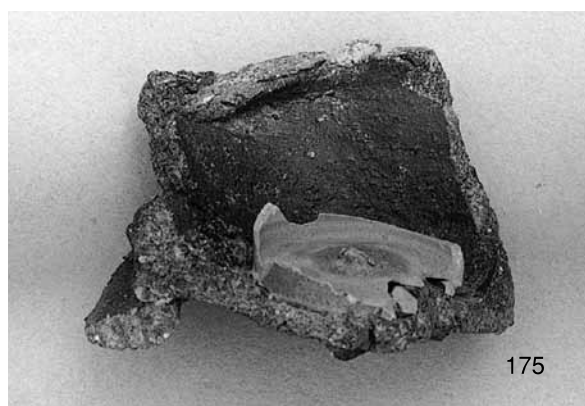
174



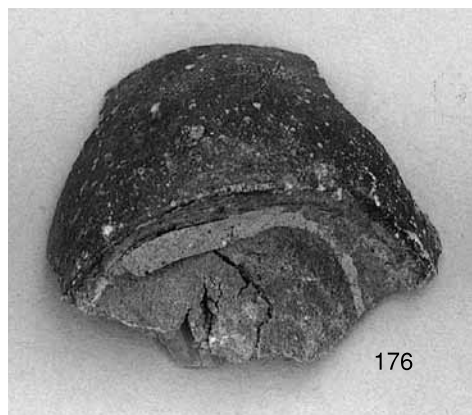
175



176



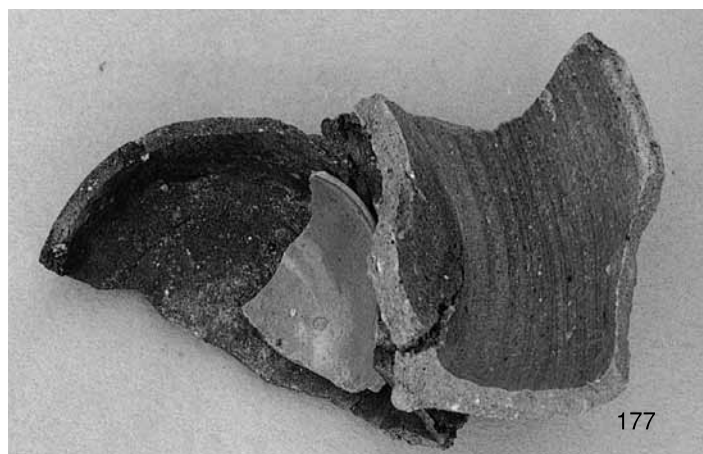
175



176



177



177

写真12 吉金窯跡出土遺物 21

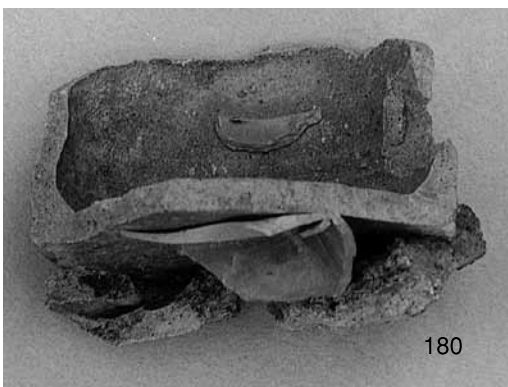
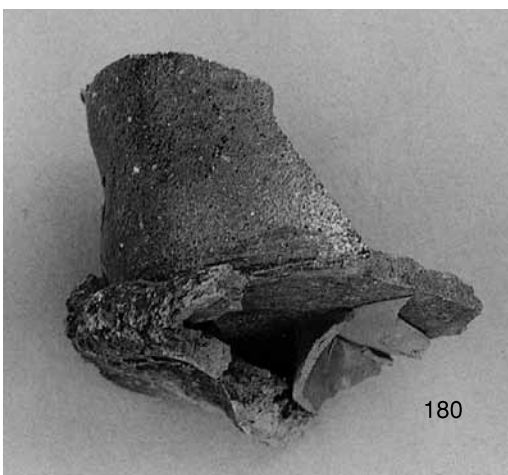
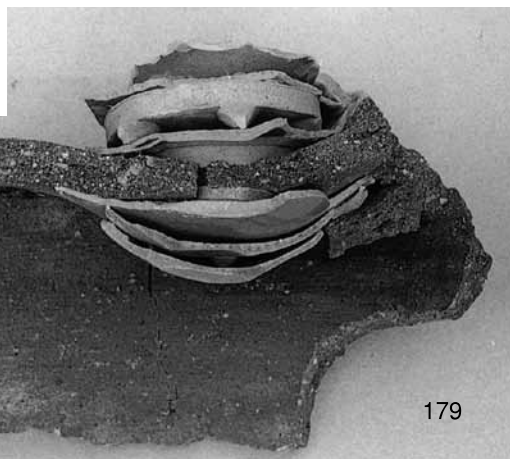
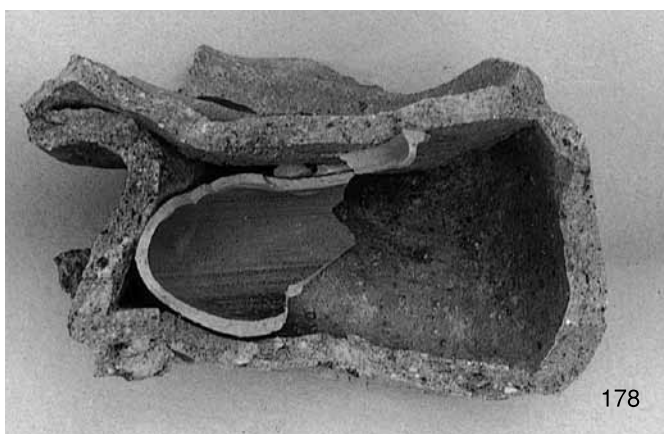
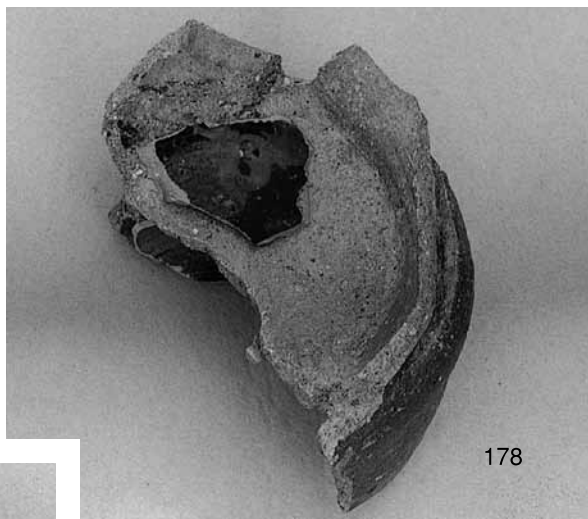
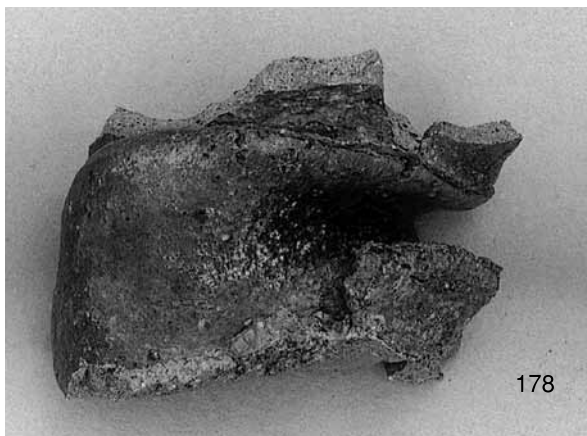


写真13 吉金窯跡出土遺物 22

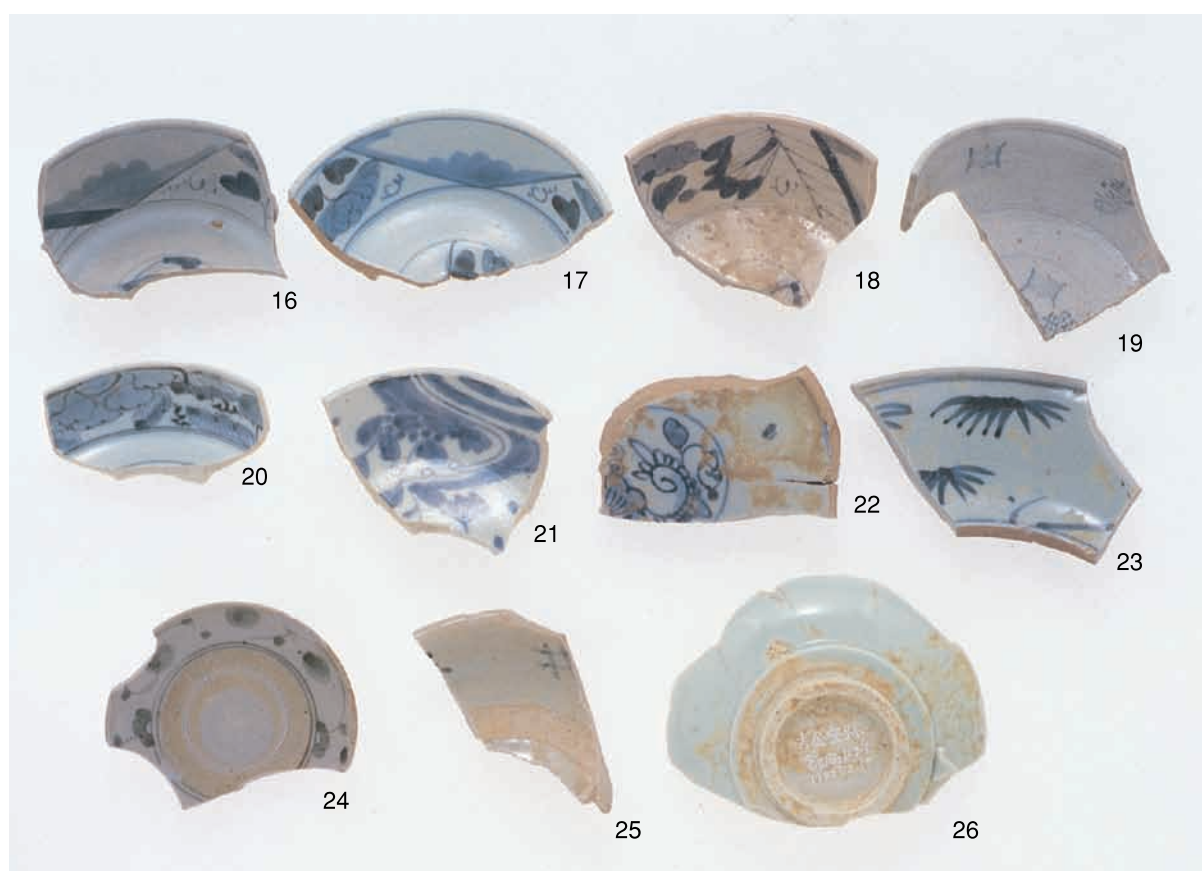
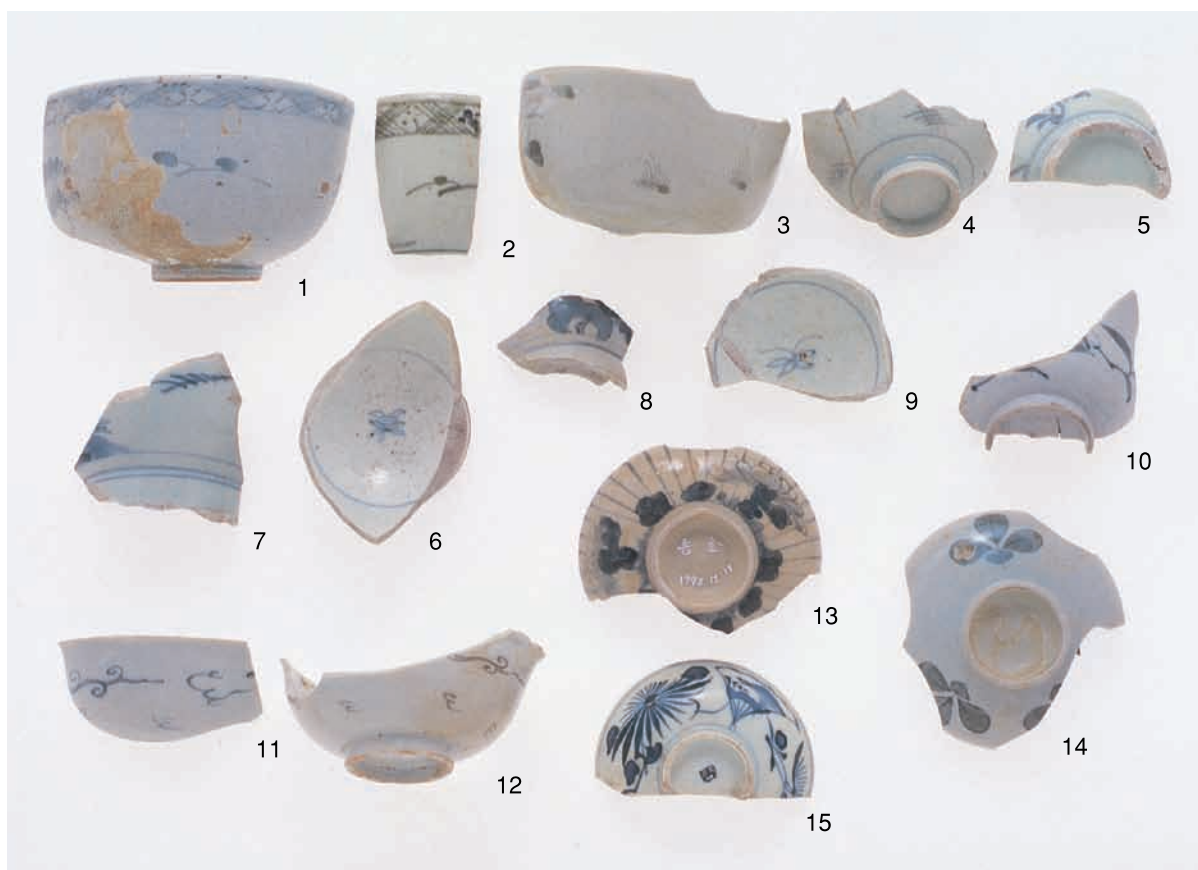


写真14 吉金窯跡出土磁器

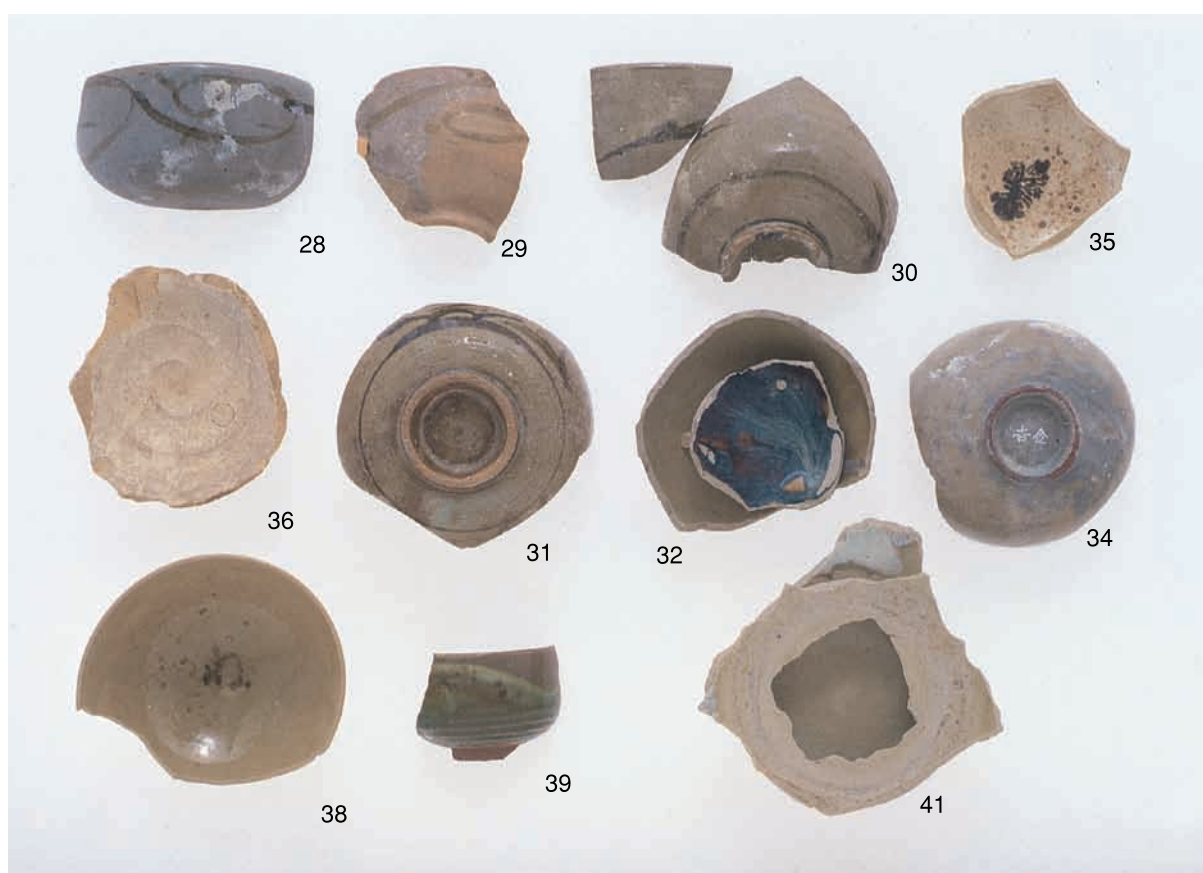


写真15 吉金窯跡出土陶器 1

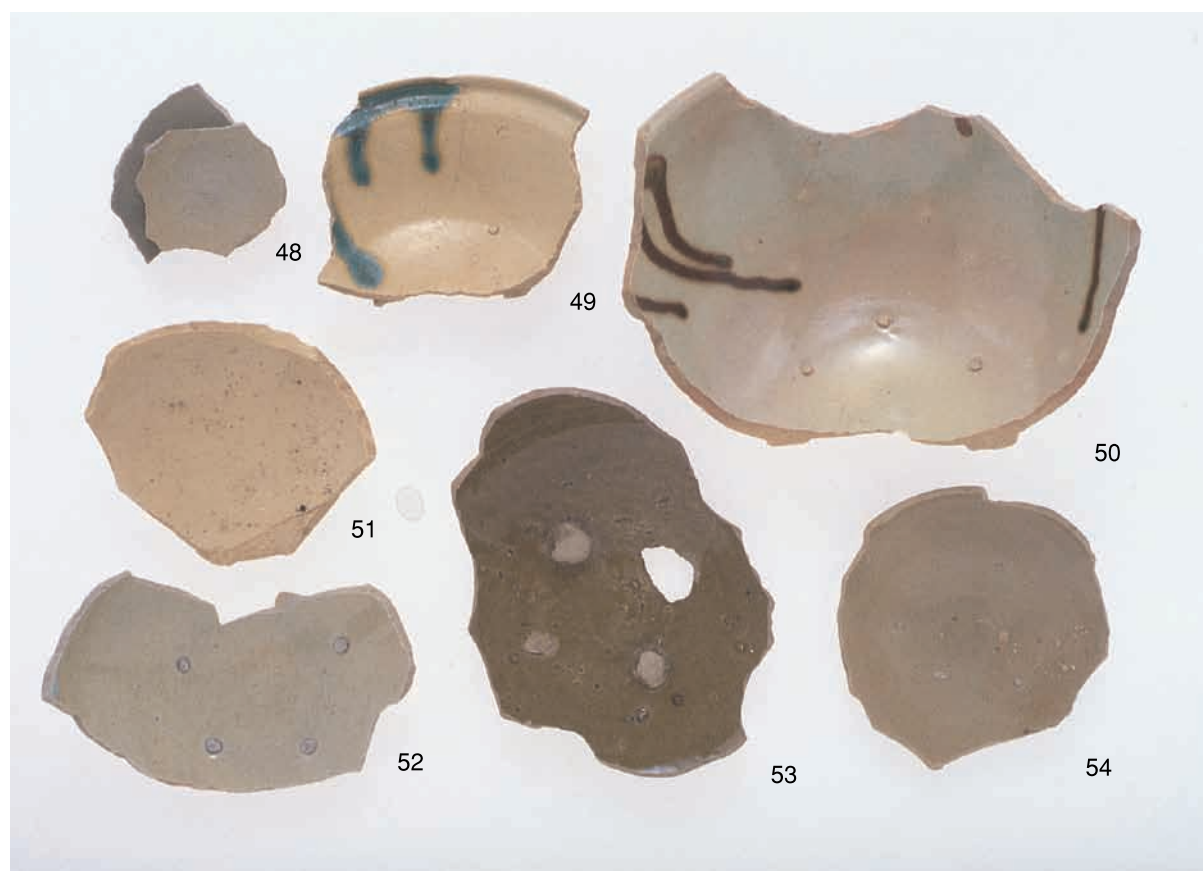
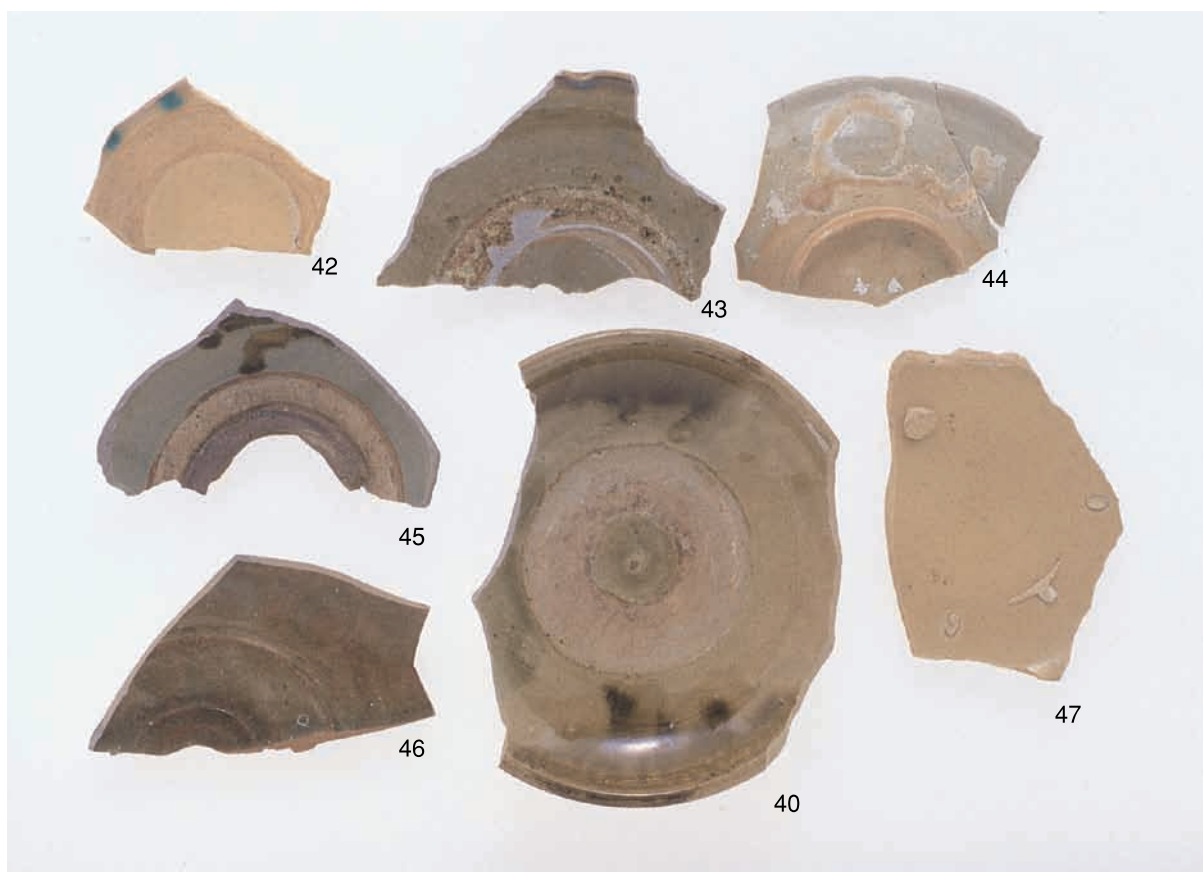


写真16 吉金窯跡出土陶器 2

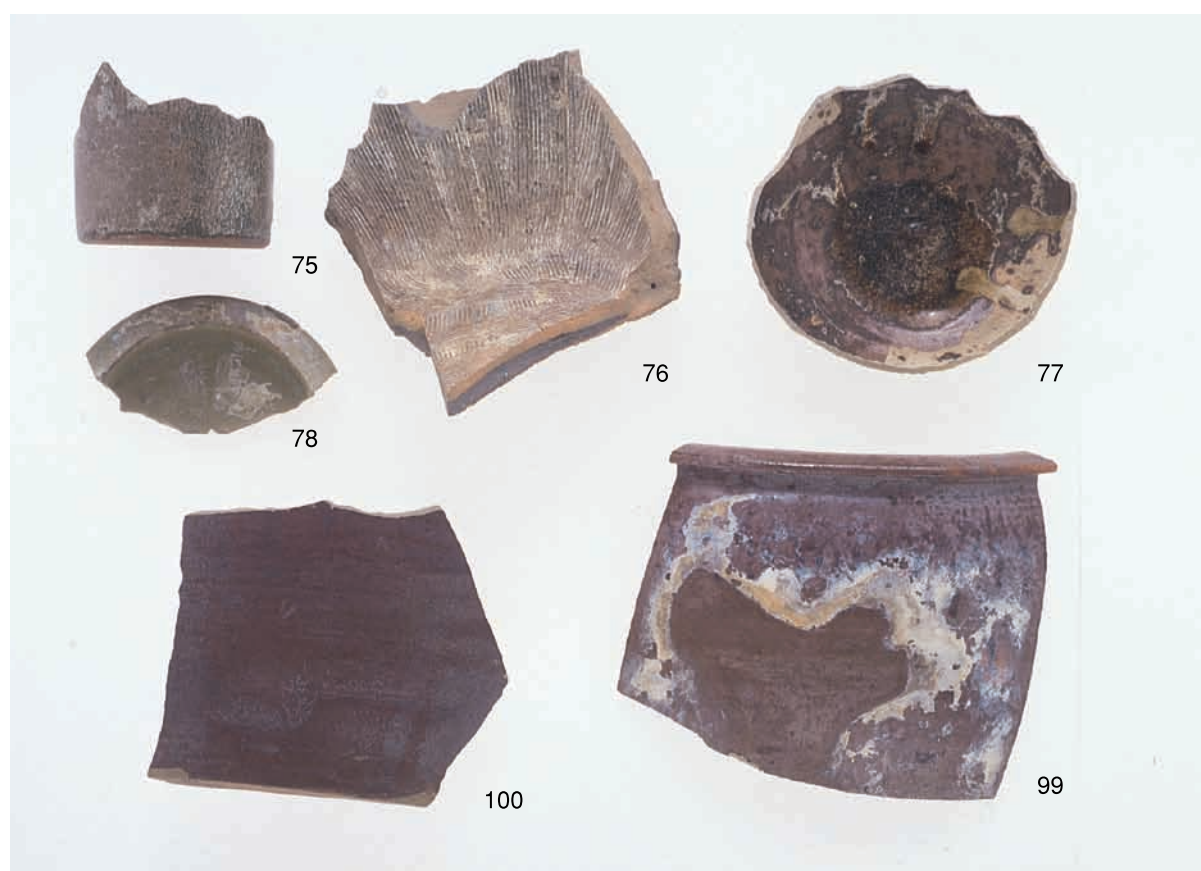


写真17 吉金窯跡出土陶器 3



写真18 吉金窯跡出土陶器 4



写真19 吉金窯跡出土陶器 5

近世の富田焼－吉金窯跡出土遺物について－
森下友子

香川県大川郡大川町富田を中心とする地方では古くから富田焼と呼ばれるやきものが焼成されている。富田焼の窯跡の一つとして吉金窯跡が知られているが、吉金窯跡は昭和43年大川町教育委員会によって発掘調査が行われた。出土遺物には陶器と磁器があるが、その作風は肥前・信楽・瀬戸地方の陶磁器と類似しており、各地の影響を受けていることがわかった。また、各地の陶磁器の製作年代観から吉金窯跡から出土した陶器・磁器は1780年代から幕末までのものであることが推定された。出土遺物の年代観は天明元（1781）年から操業を開始したという伝承と一致しており、伝承を裏付ける結果となった。

Tomita Ware at the Early Modern Age
-As for the Remains Excavated at the Yoshikane Kiln Site-
By Tomoko Morishita

The pottery called Tomita ware from of old has been baked in the district centering on Tomita Ookawa-cho Ookawa-gun Kagawa Pref. The Yoshikane kiln site, known as one of kiln sites of Tomita ware, was excavated by the Ookawa-cho board of education in Showa 43. There is ceramic ware and porcelain in the excavation remains. As for the style, they resemble pottery in the Hizen, the Shigaraki and the Seto districts and it is cleared that they have received the influence of those districts. It is supposed that they have been baked from the second half of the 18th century to the last days of the Tokugawa shogunate. A part of the Rihei baking was baked at the Yosikane kiln site, too. Therefore, the possibility that this kiln site was built by Rihei Kita of the 5th generation in the second half of the 18th century is high.

근세의 토미따야끼(富田焼)－요시가내(吉金)窯跡 출토유물에 대해서－
모리시마(森下) 토모코(友子)

카가와(香川)현 오오카와(大川)군 오오카와(大川)정 토미따(富田)를 중심으로 하는 지방에서는 예로부터 토미따야끼(富田焼)라고 불리는 도자기가 소성되고 있다. 토미따야끼(富田焼) 가마터의 하나로서 요시가내(吉金)窯跡이 알려지고 있지만, 요시가내(吉金)窯跡은 昭和43년(1968년) 오오카와(大川)정 교육위원회에 의해 발굴조사가 실시되었다. 출토유물에는 陶器와 磁器가 있지만, 그 作風은 히젠(肥前)·시가라끼(信樂)·세토(瀬戸)지방의 도자기와 유사하며, 여러 지역의 영향을 받은 것을 알았다. 요시가내(吉金)窯跡에서 출토한 陶器·磁器는 18세기 후반에서 에도(江戸)시대 말까지로 짐작되지만, 요시가내(吉金)窯跡에서는 리헤에야끼(理兵衛焼)의 일부도 소성하고 있어, 이 가마터는 18세기후반에 리헤에야끼(理兵衛焼)의 5대째인 키타리헤이(紀太理兵衛)가 만든가능성이 높은 것을 알아냈다.

近世の富田焼　－吉金窯遺跡出土古物－
森下友子

從古、以香川縣大川郡大川町富田爲中心的地區出產稱爲“富田焼”的陶磁器吉金窯遺跡是富田焼窯遺跡之一、1968 年大川町教育委員會進行了吉金窯遺跡的發掘調查。出土古物有陶器與磁器、作品風格類似肥前・信樂・瀬戸地區的陶磁器、可以推測受到這些地區的影響。從吉金窯遺跡出土的陶磁器可以推定是從 18 世紀後半期至幕末〈江戸時代末期〉的作品。理兵衛焼的一部份也在吉金窯遺跡燒成、因此可推測吉金窯遺跡是 18 世紀後半期、由理兵衛焼第 5 代紀太理兵衛〈人名〉築成的可能性高。